

---

# ブリリアントグリーン close to kira.

青柳うさぎ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ブリリアントグリーン      c l o s e    t o    k i r a .

### 【Nコード】

N 8 4 7 7 Z

### 【作者名】

青柳うさぎ

### 【あらすじ】

男子高のなかで起こる      ちいさな恋愛と、喜びと笑い、ちよっぴり悲しみの物語。

# 1 (前書き)

## 登場人物の紹介

緑王高校<sup>りょくおうこう</sup>

### 1年生

宝生<sup>ほうせい</sup>… ぼさぼさ頭・メガネっ子の演劇部員。気弱でキョドっている。素直で天然。

### 3年生 (漢字検定研究会)

吉良<sup>きり</sup>… すぐ手が出るキツイ性格だが、見た目は おとなしめ文学少年。ケータイ小説を書いている。お笑い・アニメ・冒険小説が好き。

2

陶冶<sup>てい</sup>…

1年のときに演劇部を立ち上げ、ずっと部長。呑気・温和な性格、ちよっとM気アリ。映画・演劇全般好き。

凧<sup>なぎ</sup>…

ぼわんとした性格、基本何事も拒否しない。外見は可愛いけどモトクロスのプロライダーを目指しているツワモノ。レース観戦・アニメ好き。

佐野<sup>さの</sup>…

周りをシビアな目で見ていて、さくつと怖いことを言う。派手めな外見、ムダに演技力(特に女役)アリ。恋愛・泣ける系映画が好き。

間々原<sup>ままはら</sup>… 成績優秀・運動神経もよくイケメン。2年までバレエ部のエースアタッカー。恋愛・泣ける系映画が好き。長身。喫煙する。

「あのつ、先輩…」

今にも消えそうな声が降ってきたのは、  
図書室で読書をしているときだった。

『西遊記』の4巻。

ちようど俺が好きなお約束シーン（悟空が頭に嵌めてるわつかを  
三蔵法師に締め付けられている）を読んでいるところだったんで、  
普通に無視した。

だいたい、本を読んでる最中に話しかけてくるとか 空気読めね  
えにも程がある。

一人にしとけオーラを周りに知らしめる 最も手っ取り早い方法  
は、開いた本を片手に持つこと。そうしておけば、余程重大な用件  
でない限り 誰も話しかけてこないはずだ。

しかし相手は それが通用するような繊細な精神の持ち主じゃな  
かったように。

「あ、あの…、あのおつ。吉良先輩。<sup>きらい</sup>き、吉良先輩ってば。も、も  
しもおしっ」

弱々しいくせに、シツコイ。諦め悪すぎ！

俺は仕方なく視線を上げ、  
ようやく その声の主が あいつだと知ったわけで。

又ボー—ツとしたいいつもの立ち姿に、  
ほんの一瞬だけ 俺はフリーズした。

あいつから声をかけてくるシチュエーションなんて 一つも思い  
浮かばねえ。

何で？ 何で俺に？

不覚にも動揺しそうになり、慌てて気持ちを静める。

「うつせえな。何だよ？」

出来る限り冷たく問うと、  
あいつの表情は 早くも引きつった。

「あ、あつ。はいつ。オ、オレ 先輩にお願いしたいことがあります  
してっ…」

おーおー、完全に目が泳いでるぞ。

まあ、1先生が3年に話しかけるだけでも 緊張するだろうし？  
俺の印象だと、コイツはいつも他人の後ろに隠れてる系だし？

『がおー！』 って吠え付いたら泣き出しそうだ。  
わざと低い声で凄んでやった。

「はあ？いきなりお願いだあ？図々しいな てめえ、1年のくせに」

相手はとたんに真っ青になり、

「すみませんすみませんすみませんっ！」「  
床に平伏しそうな勢いで頭を下げまくった。

元々ボサボサだった髪が　なおさら乱れ、  
重たい黒縁メガネがずり落ちそうになる。

コメツキバツタみたいな姿を見ているのもなかなか面白いけど、  
ここは図書室だし。

「騒ぐんじゃねえ。場所　わきまえろ」

そう突き刺すと、はっと口を閉じた。

「すみませ、　…っつ」

おなじ言葉を発しかけ、

慌てて両手で自分の口をふさいだ。

おい、鼻までふさいで「ふご」ってなってんぞ。  
アホすぎる。

放置してみたい気もしたが、用件が知りたいし。

「小声で、手短に、とつとと話せ」

急かすように机をコツコツ指先で叩きながら、そう命じた。

相手はびくつと身を縮めたあと、「は、はい！」何度も頷いた。

「あ、あのオレ、1年の宝生<sup>ほうせい</sup>つていいいます。えとえと、　　中学出

身で、クラスは4組で、担任は××先生で」

ああ、はいはい。

…知ってるから、んなコト。

「手短に。つつたよな？」

ジロリと睨むと、宝生は「はひっ！」って竦み上がった。  
で、いきなりガーッと言った。超手短に。

「脚本を書いて欲しいんです！ 演劇部のっ！」

は??

驚きすぎて口ポカンな俺に、こいつ気付いてねえな。

つか、目えぎゅっつつむってるから、見てもいねえな。

「夏の大会で、どーしても優勝したいんで、そのための台本をつ！  
先輩、ケータイ小説 書籍化されましたよね？ マジすげえです、  
カミです！ その才能を演劇部のためにちょこつと使ってくれませ  
んか？お願いします、ブラック・パール先生！」

勢いに乗ってトンデモネーこと喋り始めたんで、

バコン。

思わず殴っちまった。

「小声で。つつたよなあ？ きさまの脳に詰まってんのはモンブラン  
か？」



「ふ、ふあい」

殴られたトコを両手で押さえながら、あいつが涙目で俺を見た。

「ずびばぜん、ブラック・パ」

今度は俺が宝生の口を両手でふさいだ。

このまま呼吸困難にしたるか?!このヤロー!

「何で知ってんのかなあ?俺がソレだって」

ふごふご言ってるんで、口をふさいでる手を若干緩めてやった。

「ぷはっ!...えろ、んご、ふご。陶冶<sup>ぜい</sup>てんぱいが、おひえてくれまひた」

鼻をふさがれてるんで、聞き取りにくい声であいつが答えた。

陶冶、あの野郎。

そついやぁ演劇部を立ち上げた張本人はあいつだったよな。

男子高で演劇部とか、なんも楽しくねえ。よくやるわと呆れていたが。

舌打ちすると、

「ど、どおか お願いひまふ…」

俺の手のひらのしたで、宝生の唇がもごもごと動いた。

「OKもらわにゃいと、オレ 部に帰れまてん」

ふん、なるほどな。

陶冶を始め 演劇部員のヤツらは、面倒な役を 部内で一番下っ端のコイツに押し付けたってわけだ。

「も、もひろん、ひゃんとほれひもひまふ……」

「は、何？ ウゼエな、もっとハッキリ喋れっ」

「はう……」

うるうるした目で訴えられて、

俺がこいつの鼻と口をふさいでんだった。と思い出した。

仕方なく手を離すと、

ホツとしたように吐息をついた宝生は、続きを話した。

「もちろん、ちゃんとお礼はします。図書カードとか 学食の食券10枚綴りとか」

「んなシヨボーもん いらねえわ」

「そ、そおですか…、やっぱり現ナマがいいんですね、吉良先輩」

思いつきり宝生の鼻をつまんでやると、「ピー！」と笛みたいな声が出た。

「いたいタイいたいれすっ」

「てめえから見た俺は 金の亡者か？ ああ？」

「ずびばせんずびばせんっ」

「たった今から『すみません禁止令』が発令されました、言った奴はデコピンの刑」

「ぞんなああ」

涙目になっている顔を見ていたら、ゾクゾクしてきた。

こうして向かい合って立つと、ほんの少し宝生のほうが背が高い。170ちよいくらいか？

てつきり俺より小柄だと思っていたのは、コイツが猫背なせいらしい。

俺にしては珍しく、後輩との接触を楽しんでいる。

もうしばらく遊んでやってもいいかもしれない。ふとそう思った。

「いいよ、書いてやっても」

つまんでいた鼻を離しながら、軽い気持ちで口にした。

「ほんとですか！」

舞い上がる宝生に、「ただし」と人差し指をつきつける。

「おまえが主役を演ること」

「ほえ？」

言葉の意味を理解するのに、数秒かったようだ。

もっかい鼻をつまんでやろうと手を伸ばしたとき、

「ま、またまたご冗談をつ…、無理に決まってるじゃないですか、入部して2ヶ月のペーパーですよ、オレっ」

言われなくてもわかる、簡単な計算だ。

いま6月で、こいつは1年生。

「よくある話だろ。新人を主役に抜擢して周りをベテランで固めるって」

「いやいやいや、それが出来るのは すっごい期待の大型新人の場合です。自慢じゃないけど オレまったく該当していませんっ」

「ごちゃごちゃ言い出したんで、「うるせえな」と突き放した。

「話は以上。あとは部に帰って相談しな」

それだけ告げて、俺はどかっとな椅子に座った。

机に置いておいた本を手に取り、続きのページを開く。

戸惑うように しばらくその場に突っ立っていた宝生は、

これ以上 何か言っても無駄と分かったらしく、すくすく図書室から出て行った。

開いたページの文字を追ってはいるが、

俺の心はもう西遊記から何千マイルも遠く離れてた。

あいつを主人公にした脚本。

やるとしたら、本人と間逆な性格の主人公がいい。

堂々としてて、明るくて。いかにも あいつが困りそうな、無理  
そう。

考え始めたら止まらなくなった。

俺が宝生を知ったのは、一ヶ月くらい前だった。

その日 一年生は体力テストで、朝からグラウンドと体育館を占  
領してた。

こっちは普通に授業なんで、うるせえなーと思いながら午前中を  
過ごした。

昼休みになり、図書室へ向かう途中の渡り廊下で、  
外の水飲み場で顔を洗ってる一年生を見かけた。  
さっきまで体力テストをやってたから、もちろん体操服姿。

他の一年はとくに昼メシ食ってる時間なのに、まだあんなコト  
してるなんて そうとうトロイ奴だな。

ちらつとそう思っただけで 通り過ぎようとしたとき、  
あいつがオロオロし始めた。

『あれっ？あれえ…？』

びしょ濡れの顔で 目を閉じたまま、両手をつろつろ彷徨わせている。

その原因は一目で分かった。

水飲み場の端っこに準備しておいたらしきタオルが、地面に落ちている。

いつもなら知らん顔して通り過ぎていただろうけど、

そいつの動きがあまりにもドン臭く、いつまでたっても地面のタオルに気付かないんで、

イラつときた俺は そっちに歩いて行つた。

落ちているタオルを拾い、彷徨い続けている手にはしんと押し付けてやった。

『あっ』

そいつは、目を閉じたまま嬉しそうにニコツと笑った。

『す、すみませんっ』

まず顔を拭けよ、そして目を開けろや。

などと心んなかで素早く突っ込んだけど、その笑顔が直球で。

両方の頬に くつきりと浮かぶ えくぼに、俺は目が釘付けになった。

『こついう時は ありがとうだろうが』

らしくなく動揺したせいかな。それだけ言って、すぐに立ち去ったから、

あいつはソレが誰だったか知りもしないだろう。目を閉じたまま、ポカンと突っ立ってたし。

けれど、こっちは何となく気になって、渡り廊下まで戻ったあとに、こっそり様子を観察してた。

ようやく顔を拭いたあと、あいつはポケットから出した、ものすごくダサイメガネをかけ、髪をぐしゃぐしゃとかき回した。

…ヘンな奴。

なんであんなメガネかけるんだ？顔を隠すような、うっとうしい髪型にするんだ？

さっき、びしょ濡れで笑ったとき、すげえキレイな顔してたのに。

そんな疑問が湧いた途端、その一年生のことが知りたくなった。

ちよっと調べたら、名前もクラスもすぐに判明したんで、気が向くとちよこちよこ様子を見るようになった。

そのたびに俺は、あいつが猫背で、自信なさげで、引っ込み思案で、というマイナス面ばかり知ることになり、めっちゃイライラした。

なんでそんなオドオドしてんだよ、いつもいつも、ちいさくなってるんだよ！

ときどき本人に直接 怒鳴りつけそーになり、堪えるのが大変だった。

他人のことでストレス抱えるとか、俺こそ なんで？だ。

さすがにアホらしくなってきた、  
もう見ないようにしようと決めた矢先、  
むこうから接触してくるとは。

まあ、あいつが主役を？ぎ取れなければ これっきりの縁だけど。

次の日の昼休み。

陶冶にメールしたら、ラグビー部の部室にいるという返信が来た。

ちっ。

あまり近寄りたくねえ場所。

しかも運動部の部室は外にあるから遠い。

でも仕方ねえ。

他に誰もいないことを聞いてから、俺は部室に向かった。

つっても、陶冶はラグビーなどという熱血スポーツとは1ミリも係りがない。



とつくに廃部になったんで、部室を勝手に使ってるだけだ。

いちおう教師の許可は得ていて、ここは『漢字検定研究会』なる団体が使っていることになってる。そういう裏工作に長けたワルイ奴がいるのだ。

立入禁止と書かれた紙が貼ってあるドアを開けると、室内はイカレた中2男子部屋みたいな様相を呈していた。

緑色に塗られた壁には、びっしり貼られた 水着女のポスター、レーシングチーム・サッカーチームの旗。

床に散乱するマンガやエロ本、ビデオやCD。

家からこっそり持ち寄ったモノや、貰ったけど いらないからとりあえず置いていった品々。

それらに埋もれるようにして陶冶が転がっていた。

「よう、キラちゃん。おひさ」

「マジで陶冶だけなんだ？」

部屋全体に視線を走らせてから、俺は奴の隣に座った。

床はコンクリだけど 部分的に厚みのあるラグが敷いてあるんで、そこに座れば尾？骨が痛くならずに済む。

「そ。四月から昼休みが10分減ったじゃん？しかも俺とキラちゃん以外 みんな文系で、ここからずいぶん離れた校舎だろ？すっかり

足が遠のいちまって、最近じゃ俺の個室になってんの」

「それでこんな散らかってんだ？ちったあ片付けろよ。なんなら俺が片っ端から捨ててやるーか」

「いやん！ヤメテ！などとシナをつくりながら、奴は申し訳程度に雑誌を積み上げた。

「つかキラが来るのなんて半年ぶりくらいじゃね？ 図書室ばっか通いやがって、このエロ男おお」

コイツは、図書室にあるのは古典的な本「純文学」エロ本。と思い込んでるアホなんで、そーですねー。と適当なあいづちを打っておいた。

この部室が空き部屋だと発見したのは、俺と陶冶と、あと3人。

当時1年生だった俺たちは、たまたま掃除当番が一緒に、サボってぶらぶらしていたときに たまたまココを見つけただけの関係。けど、しょっちゅう集まっているうちに仲良くなっていった。

まったく性格の違う者同士だったけど、映画が好きという一点のみ 5人とも共通してたんで、

昼休みのたびにココに集合して 陶冶が家から持ってきた小型テレビでDVDを観ていた。

俺が行かなくなったのは、去年の秋。  
そのあと他の奴らがどうしていたのか、特に興味もない。

「間々原とか、おまえに会いたがつてたじえ」

聞きたくない名なんで、無意識に眉が寄る。

「別に 用ねえし」

「うつわ、つめて。つかキラちゃんらしいわ」

るせえんだよ！

俺は吼えて、陶冶の首を締めてやった。

「分かつてんだろ、なんで俺が来たか。ああ？」

「何のことすか、ブラック・パール先生」

魂を落とす勢いで 思いっきり首を締めてやった。

おえええ…つて陶冶が呻き出したんで、

仕方なく手を放してやった。モザイクかける必要性のあるモン  
見たくねーからなっ。

「なんでバラしたんだよ、てめえ。誰にも言うなつたよな？なあ  
おい、きさまのココは空洞か？」

頭を拳でグリグリしてやると、

「それヤメテえ！ いてえっ、ああっ、イタ・イイっつ」

そこはかとなく喜んでるし。

こいつマゾだったのか！そうかもしれない気配は前からあったけど。

気持ちよくしてやる義理はない。

イツキにやる気が失せ、俺は奴から手を放した。

わざとらしく咳き込み、陶冶が枯れた声で言う。

「バラしてねえよぉ〜…」

「は？ この期に及んでよく言えんなぁタコが」

「んや、マジで。宝生の奴、当ててくるんだもん」

詳しく聞いてみると、流れはこんな感じ。

夏の大会では絶対に優勝したいよなぁ。どおしたらいいかなー？

（陶冶）

オリジナルの台本だと大会で高評価を得られるみたいだぞ。（部

員A）

誰か台本書いてくれないかなぁ〜。（部員B）

ケータイ小説家のブラック・パール先生に依頼したらどうでしょうかつ。オレ、ファンなんです！（宝生）

誰だ ソレー？（一同、ざわめき）

パール先生の小説、書籍化されてるんですよ！ブログに載ってる

日記やプロフィールを読むと、たぶん高校生の男子で、近くに住んでる人だと思うんですねっ（宝生）

あゝ、あいつか。俺、ダチなんだよねゝ（陶冶）

えっ？！ も、もしかしてっ！ それって吉良先輩ですかっ？（宝生）

大当たりいゝ！ よっしやあ。宝生、キラちゃんに台本頼んで来いっ！（陶冶）

「ま、こういう いきさつなわけよー」

しれっと言う陶冶の頭を、俺はバコンと殴ってやった。

「きさまが『ダチなんだよねゝ』とか言わなきゃバレなかったんじゃないか！ 『大当たりいゝ！』じゃねえわ！ 否定しろっつもの！」

「でもさ でもさあ、すげえ！ っと思っただから つい肯定しちゃったんだよー。俺のダチだって情報だけで パール〓キラちゃん、って推理しちまうんだぜ、すごくない？ きっと宝生の奴、1行も逃さずにパールのブログ読んでたんだじえゝ」

たぶん そうなんだろうな。

ブログには日記っぽい文章もちよこちよこ載せてるんで、俺が見た景色とか 身近にいる人間の観察とかから垣間見える日常が、

あいつの見ているそれとリンクしていたとしてもおかしくない。

ちいさな手がかりを拾い集め、つなげていけば、近くに住む高校生男子・陶冶のダチ、という少ないソースから俺にたどり着く可能性はゼロじゃない。

しかし。

「あいつ、見かけによらずエロエロだな」

「だよな　だよなああ！パールの小説ってかなりハードな官能系だし」

生々しいな。

けど、「冗談でもなんでもなく、さまざまな成り行き上、俺はそういう小説ばっか書いている。

いちおう自分が面白いと納得できる内容しか書いてない（つか書けない）んで、

『笑えるエロ小説』みたいな路線になってる。

「宝生の萌えツボってどのカップリングだろうなあ？小学校教師と児童かな、クラスメイト同士かな。それともフリーターとジュエリーショップの女社長？」

「どーでもいいいつつの」

いつか聞いてみたい気も若干するけど。

ま、とにかく、バレちまったものはしょーがない。

「演劇部内なら許すけど、絶対にこれ以上 広めるんじゃないぞ」

「そこはダイジョブ。部員のみんなに、極秘事項だぞ！ってよく言い聞かせてるんで」

どうだか。

ここまでの いきさつを聞いた限り、全然まったく信用できん。

俺が向ける疑わしい目に構わず、  
陶冶がニコニコと聞いてきた。

「で？ 宝生に主役やれとか、なに企んでんの キラちん？」

「面白そーだから。あの気弱な奴が本番前とかにガタガタ&ブルブルする様子が見てーから」

「げーー。相変わらず見事なSっぷり」

怖いわあ、震えちゃう。とか言いながらゲハゲハ笑っている。

「決まりそうか？主役」

「まだ未定」。俺は大賛成だけどさあ、無理だらうって意見もやっぱあんのよ」

ふうん。こいつが部長してるくらいだから、演劇部って自由奔放っぽいイメージだったけど、保守的な輩もいるんだ？

けど陶冶が賛成してんなら、ほぼ決まりだろ。

そんなことを漠然と思っていたら、

「けど あいつ、素材はいいからなあ。もったいないとは思ってた」

ついでのようにポロリと陶冶が言った。

やっぱりこいつも気付いてたか。

そついう目を持つてるのは知ってる。

ちゃらんぼらん奴だけど、ダテに部を立ち上げたわけじゃない。いい加減に部長をやってるわけでもない。

「精神的なモノが変われば、化けるかもねえ？」

含み笑いしながら、俺を横目で見遣る。

思ってたことを見透かされたようで面白くねー。

「何言ってるんだ。あのままのほぅが笑えるっつの」

そつ投げて、俺は立ち上がった。

ドアに手を伸ばしかけ、ふと振り向く。

「そついや、何で おまえら大会での優勝に拘こたわってたんだ？」

軽い気持ちで聞いたんだけど、ちよつと後悔した。

陶冶の目が、よくぞ聞いてくれました！みたくギンギンになったから。



「俺らをバカにしてる女子高があつてさあ！！実績はあるし 確かに上手いんだけど、大会で顔を合わすたびに『男ばつかの演劇部なんてバカじゃないの、ありえない！』って見下した態度とってくんの。」

超ムカツクから、ぜってー勝つてやろう！ってみんな燃えてるわけ！まったく あいつら、ちよっとキレイだからって 女だからって、えばりやがってええ」

ほつといたら ずっと悪口言つてそうだ。

「あーそりや大変。そんじゃ！」

って、俺はさっさと退散した。

宝生が俺に会いにきたのは、それから2日後だった。

放課後、いつものように図書室で読書していると、緊張しまくりオーラを纏いつかせてあいつが近づいてきたわけで。

10M先にしても分かるほど動きがおかしい。超ギクシャクしてる。

目の前で立ち止まったんで、俺は親切にも 読んでいた文庫を閉じてやった。なのにな。

「き！き！きらきら先輩っつー！！」

俺は立ち上がり、

あいつの頭をペンケースで殴ってやった。

「い、痛あ！ひどいですっ、せんぱ……」

親の敵を見つめるような目で睨んでやると、  
宝生は口を閉じた。

座れ。と親指で椅子を示し、オロオロしながら奴が腰を下ろすまで、俺はヒトコトも喋ってやらなかった。

「あ、あのお……、うるさくしたこと、謝りますっ……。図書室では静かに、でしたよね」

ようやく小声でそう言ってきたんで、  
頷いてやった。

「モンブランの脳みそでも 1ミクロンくらいは学習能力備わってんだな」

やつと口をきいてもらえたことが嬉しいのか、

あいつは ぱあぁっと明るい表情になった。

ダサくて でっかいメガネのせいで、はつきりとは見えないが。

「は、はいっ。ちゃんと覚えてます、先輩に言われたこと ぜんぶ。でもでも、さすがですねっ。脳みそがモンブランなんて素敵な表現、なかなかできません。ほんとに脳みそがモンブランだったらどんな

に素晴らしいだろうって、オレあれから　ずううっと考えてました」

珍しく滑らかにアホなこと言って、嬉しそうに笑う。

せつかくの笑顔なのに、顔がよく見えねえからイライラした。

「バカか。モンブランはケーキだから価値があんだよ、てめえの頭んなかに詰まってたって素晴らしいかもねーわ」

そう投げて、俺は右手を伸ばし、宝生のメガネを取ってやった。  
素早い動きだったんで、鈍いコイツは気付くのに時間がかかったらしい。

「うー」

慌てて自分の顔を両手でおおった。

何で隠すかな。

ムツときたんで、その手をぱちんと叩いてやった。

「痛っ。せ、先輩っつ　」

「何だよ、おまえは。直接見られると妖怪にでも変化するわけ？」

「へ？は？　あははっ。そんなスゴ技、持ってませんよぉ」

何がウケたのか、楽しげに笑う。

顔を隠すことは諦めたようだ。

メガネを返す気になれなくて、俺はそれをかけてみた。

「重つ。こんな古臭いメガネを平気で売ってる店の根性を尊敬するわ」

サイズはちょうどいい。

度が強いかもしれないんで、クラクラするかと用心してたけど、まったくそんなコトなかった。

つか。コレただのガラスじゃね？

何で？

こいつマジで顔を隠すためだけに かけてるってか？

そんな疑問を持ったとき、

「メガネ似合いますねー、先輩」

宝生は、俺を眺めて そんなことをほざいた。

フザケてんのかと思って睨んだら、本気でうつとり見詰めてるし。

「こんなダサイメガネが似合ってたまるか」

ソッコー外して、突き返してやった。

「で？ 俺に何か用？」

促すと、奴は『すっかり忘れてました！』的な焦った表情を浮かべたあと、ようやく本題を切り出してきた。

「あの、部で話し合った結果、オレが主役でもいいという結論になりました…。なので、吉良先輩。脚本 よろしくおねがいします」

最後のところでわざわざ立ち上がり、深々と頭を下げた。  
大げさな。

「ふーん。よく みんな納得したな」

「はい。あ、でも。実はいくつか条件を出されてしまいました…。これなんです」

そう言って 細かい字が書いてあるメモを差し出してくるけど、俺は受け取らない。

「えと、えと、…先輩？ これを満たす内容でお願いしたいと、部員みんなから言いつけられていて…」

ザケンじゃねーよ。

俺は低く凄んだ。

「あれこれ注文つけてくるなら自分で書け、ばーか。って言っとけ」

「はひ？！こ、困ります、そんなぁ」

「あのな。こっちは商売でやってんじゃねーんだよ。思い通りのものが書いて欲しいならプロに発注しろや」

反論する要素が一つも思い浮かばないのか、

宝生は口をパクパクさせた。

でも俺の言ってることが常識的なのは、ちょっと考えりや分かるはずだ。

まあ、こいつは部内でもっとも下っ端で、部員みんなの意見を俺に伝えることが仕事なんで、個人的な意見を述べる権限もないんだろーけど。

これ以上こっちから話すことねーな。

どっちみち こいつ、他の部員らに相談しに戻んだろ。

そう思って文庫を手にとったとき、

「わかりました」

どことなくトーンダウンしたような宝生の声が降ってきた。

「先輩が書きたいものを書いてください。オレもほんとは、そのほうがいいし」

さっきまでと違って、ヘンな力が抜けた声と態度。

この場で判断できるような根性も、その権限もこいつにはないと思ってた。

ちょっと意外で、俺は宝生の顔を凝視しちまった。

「あつ。…え、えと、あのそのっ」

刺すような視線に気付くと、いつものモードに戻っちまったけど。

「エラソーなこと言っちゃいましたけど、でもっ、あの、オレ 頑張って部員みんなを説得するんで、だいじょぶですっ。任しといてくださいっ。もしかしたら時間がかかるかもだけど、気にせず、書き始めてくださいね」

つつかえ突つかえ、そう説明した。

へえー。

こいつって。

俺はズボンのポケットからケータイを出し、内蔵してあるSDカードを抜き取った。

それを持った手をグーにして宝生の前に突き出すと、ポカンと口を開けて俺の顔とグーの手を見比べた。

「あのお？ ……いたタタタタっつ！」

グーで こめかみをグリグリしてやった。

「さっさと受け取らんか」

「え？ えっ？」

戸惑いながらも 両手のひらを差し出してきたので、グーの手を開いて そのうえにSDを落としてやった。

目をパチクリしてるってことは、まだ分かってねーんだろうな。

「台本。いちおう書いたんで、目を通すよう伝える。そっちからの修正とか細かい指示は、データじゃなく出力した紙で持ってこい」

そこまで言われて、やっと理解できたようだ。

「だ、だいほん…、っ?! ええええ!! も、もう?! もう書いてたんですかぁ!?!」

ばこっ!

俺が宝生の脳天をペンケースで殴った音。

ほら見る、でけえ声出すから周りの視線が集中したじゃねえか。

「あ! す、すみま」

せん。まで言わずに あいつは慌てて手のひらで口をふさいだ。そのまま、押さえきれないってふうに にこおっと笑う。

「あ、ありがとうございますっ。でも正式にオファーできてなかったのに、どーして…?」

「別に。暇だったから」

実はこいつが話を持ってきた3日前から書いていた。

やたら筆がのったし、陶冶が賛成してたんで 主役取ってくる予測はついてたし。

「感激ですうつ」



当たり前みたいに両手を握られ、  
ギョツとした。

「どうしよう、読むの　すげえ楽しみ…！心臓バクバクですっつ」

つか、こっちもバクバクなんだけど。

何だ何だ、手え握られたくらいで、

どーしたんだ俺は？

「…読んでガツカリかもよ？」

「ありません、絶対。だってだって　これを書いたのはブラック・  
パール先生なんですよっ？あの名作『バイオレンス・エンドレス・  
ピストン　〜彼女はワイマックス〜』とか『執事としっぽり』を執  
筆された、ブラック…」

奴の手を振り払い、

頭部をつかんで力任せに揺さぶってやった。

「あわわわわわわ」

「その名を呼ぶんじゃないよ、おらあ」

演劇部内だけの極秘事項だろうか！

「でしたね。…えへへ」

この野郎　。

思っ存分ニヤケやがって。

「さっさと持ってけっ」

しっしっ。片手で追っ払いながら、俺は今度こそ文庫を開いた。

読書の邪魔、という目で睨んでやると、あいつは慌てて立ち上がった。

「ではっ、失礼します。ほんとにホントに ありがとございました！」

ぺこつと頭を下げ、パタパタ走りだした。

「ごらああ！図書館で走んなー！」

追っかけるように図書委員の怒鳴り声が聞こえてきて、ぶはつと吹き出しちまった。

やっぱ、抜けた奴。

でもバカじゃない。

今日、あいつ一度も「すみません」を言わなかった。

前回 俺が禁止令を出したんで、守ろうと努力してるっぽい。

それにしても、手を握られたとき なんて あんなにドキドキしたんだろ。

予想外に奴の手のひらが あったかかったからか？握るといふよりも すっぱり包まれた感じだったし。

つか…なんであいつのほうが俺より手のひら 大きいんだよ。

そこは、かなり面白くなかった。

宝生が脚本の修正を持ってきたのは、その翌々日だった。

しかも朝、俺の教室まで あいつはわざわざ やって来た。

勇気を振り絞って3年の教室に来たのは、顔を見れば一目瞭然。  
俯きすぎてて つむじしか見えねえし、猫背に磨きがかかってい  
て俺よりも5センチは背が低くなっていた。

「何だよ？ わざわざ」

無理してこんなトコ来なくても、放課後でいいのに。  
そう思って聞くと、奴は どもりながらモゴモゴ答え始めた。

「ほ、ほほ、ほんとに昨日 渡したかったんですが…、遅い時間にな  
ってしまったので…先輩は もう帰られていて。 は、はやく渡  
したくて、教室に来ちゃいました」

クラスの奴らは、例外なくこの挙動不審にオドオドしている一年  
をジロジロ見ている。

なので、ますますこいつも堅くなるわけだ。

「朝っぱらからシケた面見せてんじゃねー、テンション下がんだろ  
うが！ おら 猫背っ！」

って、俺は背中を思いつき蹴ってやった。

盛大にヨロめいたあと、奴は「はひっ！」裏返った声で答えた。

「えと、部員全員、読ませていただきましたっ！　いくつか修正が入ったので、見てくださいっ！」

最初からそうやって言やあいんだよ。  
ま、それが出来てりゃコイツも苦労しねえか。

「わかった。そんじゃ」

差し出されたプリントの束を受け取り、それを読みながら俺はさっさと自分の席に向かおうとした。  
が。

「あのッ！　先輩」

珍しく気迫ある声で呼び止められた。  
よからぬことを言いそうな気配に、俺はがばつと振り向く。

「台本、すごく。すっごく面白かったです！展開が超早くて刺激的で、笑えて。さすがブラック」

ふっつ。

ぎりぎりセーフ！

フルネームが出るまえに宝生の口を手でふさぐミッション、成功！

ふっふっ言ってる奴の耳に、冷たく命令した。  
「今度それ言ったら、台本没収」

「ふええええ！気をつけまふ〜！」

手を放したら、ぴゅーっと逃げてった。

まったく…朝から疲れさせやがって。

でも、あの脚本を面白いと思える感性は認めよう。

俺が書いたのは、曾祖父の記憶のなかに飛んだ高校生の話だ。

気がつけば 戦地で、曾祖父として兵隊になっている自分。  
混乱するなか、

周りに励まされり、勇気をもらったりして、

その時代で生きる覚悟をもつ。

しかし射撃の腕を買われて重要な暗殺任務を命じられ、

迷った末に引き金を引けず、敵から弾丸の雨を浴びちまう。

そこで現代に戻る（夢を見ていただけ）。という、

言ってしまうば 鉄板な落ちだ。

重くなりそうだけど、兵隊仲間は愉快な奴らばかりだし、主人公も明るい性格なので、全体としては笑える場面が多い。

けど、命の遣り取りをするシビアな戦闘シーンだけはぴしっと怖い。

そんな対比がイケてるストーリーにしたつもり。

自分のセンスを宝生に理解してもらえたのは満足だ。

ちょっと いい気分で席についたとき、

まるで待っていたように やたら目立つ人物が寄って来た。

むさ苦しい男子校のなかでカクジツに浮く、華やかオーラを持った奴。

「キラっち、さっきの誰よ？」

「は？ …… 佐野<sup>さの</sup>？」

久々に見た、こいつ。

なんでいるんだ？ 文系は別の棟なのに。

思ったことが顔に出てたのか、

「んな珍しそーに見なくてもいいじゃん。鈴木にジャージ借りに来たんだよ」

わざわざ説明して、苦笑いをした。

「俺とは喋りたくねーか？ キラっちは」

「んなことねえよ」

ウソだけど。

「マジで？ てっきり避けられてんだと思ってた」

はあー。

俺は溜息をついた。

こいつは時々こういう喋り方をし、俺を面倒くせえ気分させる。

「おまえな、そーやって考えること自体、自意識過剰だったの」

「だったら また前みたいに5人で遊ぼうよ。昼休みは難しーけど、放課後なら集まれんだろ。知ってる？ 間々原 とつくに部活 引退してんだぜ」

「悪い。勉強しねえと。俺、無理めなトコ狙ってっから」  
暗に おまえも受験生だろ、って牽制したつもりだったけど。  
佐野にはぜんぜん効果がなかった。

「えー、こんなモン書いてやる時間はあるくせにー？」

と、俺の持つてる台本を指先でつついてきた。

「あの冴えない1年、演劇部なんだ？」

って、だいたい把握されてるし。

さつき宝生がデカイ声で喋りやがったせいだ。  
あのヤロおー。

「わかったよ、今度 集まろう。おまえが段取り組んどけ、言いだしっぺなんだから」

「了解」

佐野は にまっと笑い、軽い足取りで教室を出てった。

誰が行くか。

俺は心のなかで舌を出した。  
集まる日には風邪ひいてやるっつの。

授業中、台本に入れられた修正にざっと目を通した。

演劇部の連中は赤ペンで書き込んでいる。

そこをチェックしていくうち、だんだんムカムカしてきた。

『セリフ長すぎ』 10箇所ほど

『女の子を出して欲しい』 女装したい部員がいるらしい

『無理!』 6箇所ほど

『登場人物を増やしてほしい』 知るか!

何だこれ! 好き放題書きやがって!

しかも最後のところで、

『全体的に長いので30%くらい削ってください』  
だとおお?!

どんだけゆっくりセリフ読むつもりだ、てめえら!

こっちはちゃんと素読みして 時間を計って調整してんだよ!

昼休み。

弁当を食い終えた俺は、台本を掴んでラグビー部の部室に向かった。

当然、陶冶に文句をつけるため。

台本には青ペンで こっちからの返答を書き込んでおいた。



素直に直してやる部分よりも、てめえらが考えなおせ、バカ。的部分のほうがずっと多いんで、もはや台本は青と赤の文字がぎっしり。もとの字がよく見えない状態になっていた。

「おいコラ、陶冶！」

怒鳴りながら部室のドアを開けた俺は、室内を見てギクツとした。

陶冶は不在。  
代わりに間々原がいた。

とつさにくると180度 方向転換し、  
「おーい、何だよ 逃げるのか？」  
背中からの低い声に、ムカツときた。

「はあ？ 誰が、なんで、逃げなきゃいけないんだよ！」  
って、再度くるるときびすを返す。

「俺は陶冶に用があつて来たんだ、てめえにはねーから出て行くんだつつの！」

「ココで待ってりゃいい。そのうち来るだろ」

さらっと返されて、返答に詰まる。

「逃げる気がねえなら、普通はそつするよな？」

ぐぐ。

腹立つけど その通りなんで、俺はわざとズカズカ室内に踏み入り、

間々原から最も離れた場所に どかつと座った。

「そこ尻が痛えだろ？こっち来れば」

などと声をかけられ、

「尻の肉にも たまには刺激を与えたほうがいいんだよ」  
勢いだけで言い返した。

間々原が呆れたように「ふん」と鼻で笑う。

…相変わらず憎たらしい奴だっ！

「吉良、演劇部の台本書いてるんだってな」

何食わぬ顔で 奴が聞いてきた。

「佐野がそう言った」

「……」

会話する気 ねえんだけど。

俺は短く「関係ねーだろ」と答えた。

こっちの態度なんてお構いなしって感じで、  
奴は慣れた仕草でタバコに火をつけた。

「どっという心境の変化？ おまえ、そういう面倒なこと引き受ける  
タイプじゃねえだろ」

唇から細く煙を吐きながら、のんびりと話を続けてくる。

校内で平然と喫煙する ド不良の分際で、  
こいつの成績は常にトップ。

教師に絶大な信頼があつて、この部室を『漢字検定研究会』が使  
うと申請し、まんまと確保した張本人。

友達でいれば、かなり頼れるし 面白えし、いい男。  
でも。

「どーでもいいだろ」

ぶすつと答えると、

「どんなストーリーなんだ？その台本」

こっちに手を伸ばしてきた。

俺は反射的に飛び上がり、台本をぎゅっと抱きこんだ体勢で後退  
した。

みつともない動きだつて自覚はあるけど、  
触られるよかマシ！

間々原は若干目を丸くして、そんな俺を見た。

「めっちゃめっちゃビビってんな」

くすつと笑い、くわえていたタバコを携帯灰皿にもみ消した。

「まだダメなんだ？俺のこと」

「はあっ？」

何だそれ、  
何だそれっ！

「そういうことじゃねーっつの！このアホンダラ！」

思わず吠え付いたとき、  
間々原が立ち上がった。

「もう行くよ。俺がココにいます、吉良のストレスになりそうだし  
？」

その言い方にカチンとくるけど、  
いなくなってくれるのは有難い。

ホッとした次の瞬間、  
目の前に奴がしゃがみ込んできた。

「…っ！」

気が緩んでいた俺は、逃げる隙もなく間々原に抱きしめられていた。

「何っ、だよ！てめえ、放せ！このっ」

ジタバタする前に、もう両手は纏めて捕まえられている。

このクソ野郎は、マジむかつくことに長身で、去年までバレー部でアタッカーだったから筋力もある。いわゆる文武両道ってやつ。

どんだけ俺が、悔しい思いをしたことが。

「やめ！ ……っっ」

奴が顔を近づけてきて、

その狙いが分かった俺は必死で首をひねったけど。

痛いほど顎を掴まれ、呻き声は間々原の唇にかき消されていた。

『ねえキラっち。ここのシーンなんだけど、後ろからのほうがよくない？ 間々原あ、俺らでちょっと実演してみよーよ』

1年前。俺が書いた小説を読みながら佐野が言った。

『いいよ』と応じる間々原。

あれが おかしくなるキツカケだった。

実演して見せてもらうとか、体験してみるとか、何アホなことしてたんだろ。

あんときの自分に往復ビンタしてやりてー！

「…っ、 んん！ う」

間々原の舌が、当然のように俺の口のなかに入ってくる。

力いっぱい押し返そうとするけど、奴の身体はびくともしない。そーだよ、こいつは…いつも。

安心させといて、油断させといて、圧倒的な力でねじ伏せる。

だから怖かった。

顔を見たくなかった。

もつと恐ろしいのは、  
嫌悪感はずげえのに、  
やがて男の部分が快感を捉えること。  
抵抗する力が抜けてくこと、だ。

「ふ…、 んっ…っ」

こんなん、嫌だ。

前とおんなじじゃねーか！

がりっ。

気がつけば間々原の唇に噛み付いていて、  
あいつはゆっくり俺から顔を離した。

口の端から僅かに滲む血を指先で拭い、  
不思議そうに見遣る。

その隙に俺は奴を押しつけ、転がるように駆け出した。

勢いよくドアを開けると 目の前に陶冶がいて、  
危うく ぶつかるところだった。

「…おわっ、ビビった！ どしたのキラちゃん」

俺を見てそう叫び、

室内にいる間々原を見て ますます目を丸くした。

「えええー、珍しいなあ二人が一緒なんて。めっちゃ久々じゃね？」

明るく声をかけてきたけど、俺は言葉が出なかった。

けど間々原は。

「ああ。でもまた5人で集まろうって話が出る。陶冶にもそのうち 佐野から連絡いくと思っぜ」

何もなかったように笑顔でそう返し、「こ丁寧にも一言付け足した。

「そっだよな、吉良？」

こんのクソヤロおー。

ここで平然と そうだよ！とでも答えられたら すごいだろうけど、

やってやりてえけど、無理っ！

俺はぷいつと顔を背けた。

くそー、ちくしょー。

「ご機嫌ナナメみたいだ。俺は退散するよ」

笑いを含んだ声が聞こえ、  
いったい何なんだデメーのその余裕は！  
って頭に血が昇った。

奴が出て行き、ムスツとした顔で部屋に戻る俺に、  
おいおいおい〜と陶冶が当惑顔で言い出した。

「おまえら何なん？ ケンカでもしてんのぉ？」

「してねーよっ！」

俺の隣に座りながら、奴は首をぶんぶん振る。

「いやいやあ、どう見ても変だよあ？ つーか…キラちゃんがココに  
来なくなったのって、ソレが原因じゃねえの」

はあ？

じろつと睨むと、陶冶は一呼吸置いたあとに ケロツと言いつ  
た。「だからー、ママちゃんとケンカしたせいじゃねえのぉ？ 半年



前のあんどとき、二人とも明らかにおかしかったじえ〜？ いんや、うーん、正確にはみんなちょこつとづつヘンだった」

「へ？」

こいつだけは なんも気付いてないと思ってた。

陶冶がいる昼休みは、4人とも普通にしてたから。

それでも妙な空気は溢れていたらしい。

「…どーでもいいだろ、終わったことだ。あんどときも、別にケンカとかじゃねーし」

そう答えると、陶冶はへらつと笑って あっさり頷いた。

「ならいーけど。キラちゃん プリン食う？購買で買って来たの、半分やるし？」

こいつのこーゆートコ、助かるな！。

「いらない。それよか、台本！ 再考ありまくりだぞっ」

「マジか？ 俺は2コ『無理！』入れただけよ。『10秒間ジャンプする』と『十地固めをきめる』のトコ」

「はあ？なんで無理？！」

「演劇部員はフツの人間なのよ、キラちゃんっ」

さつき ぎゅっと握っちまったんで、かなりシワが寄った台本をひろげ、

俺たちは打ち合わせを始めた。

頭のなかから 間々原を追い払うのに、若干苦勞したけど。

陶冶は、フィジカルに不可能と思われる部分だけを削除し、あとは脚本家（＝俺）の意向を大方 了承してくれた。

もともと 俺が初めて書いた小説を「面白い！」と絶賛したのも、メジャー雑誌に投稿（勝手に）したのもコイツ。

互いの狙いどころや外せない部分は把握してるんで、話し合いはサクサク進んだ。

赤・青チェックがはいった台本をコピーして陶冶に渡し、一仕事終了。

ちょうど昼休みも終わった。

この程度の修正なら、たいして時間かかんねえな。

俺は授業中にこっそりケータイを出し、ちゃっちゃと作業を済ませた。

小説を書くときもそうだけど、授業中って超集中できる。

俺の場合、執筆に使うのはケータイだから問題ないし、

学校という特殊な背景に身を置いている状況が肝心だと思う。

つか正直、家にいるときって他にやりたいこと たくさんある。

ゲームだろ、録画した深夜番組を観まくるだろ、ぼけええーっとするだろ。

大忙しじゃん。

放課後には修正が終わってたんで、SDカードを陶冶に持ってっ

てやろうと思った。

でも演劇部で知った顔は陶冶と宝生だけだし。  
部室の前まで行っただけど、ドアを開けるのに躊躇した。  
もしあの2人がいなかったら困る。あんた誰？とか言われそーだ。

陶冶にメールして、取りに来てもらうか。

そう思っ て引き返そうとしたとき、

「読んだ 読んだ！マジひっくり返ったあゝ！」

ドアの向こうから大きな声が聞こえてきて、ふと立ち止まった。

「めつつちゃエロかったよな！ ブラックなんとかって、ほんとに  
吉良先輩？」

「陶冶先輩が言っ てたんだから100%そーだろ」

「うわー、あの先輩を見る目 変わりそ！ 超厳しくてピシッとし  
てそーなのに、中身はエロエロ、みたいな」

「すました顔して、いっつもHなことばっか考えてんのかなあ。あ  
んなふうにされたいっ て願望を小説にしたりして！」

「いゝゝ！俺、吉良先輩ならイケル」

「俺もっ。でも 掘られるのは お断りっす」

ぎやははは。

大笑いしてやがるノータリンどもの声をしみじみと聞き、

さて。どんな言葉で奈落のソコに突き落としてやるーか。

って画策していたら、  
ぼんと肩を叩かれた。

振り向くと宝生がいる。

見たことのない真剣な表情で。

そのまま軽く肩を引かれ、

ドアから少し遠ざかった俺に あいつは にこつと笑いかけた。

そのままガチャリとドアを開け、

「み、みみ、みなさんっ！ 台本を書いてくれた吉良先輩が来てくれ  
れましたよおっ！」

ムリヤリ作った明るい声で言い放ち、

俺を前へと押しやった。

好き放題 言っていた直後に 本人登場で、  
室内にいた部員らは当然 完全フリーズだ。

こっちもどんな顔していいか分かんねーしっ。

微妙な空気の中、宝生が一生懸命に話し始めた。

「あ、あのっ、みなさん知っての通り、先輩はとっつても忙しい人  
なんですっ！それなのに演劇部のために無償で脚本を書いてくれる  
なんて、感謝感激ですよねっ！ この機会に お礼を言いましょ  
うよっー！」

げ。

これ どんなノリ？ どんなプレイ？！

こいつら全員、俺がどんな小説書いてるか知ってんだぞ。

さっきもそのコトで さんざん盛り上がってやがったわけで。

しかし。

「吉良先輩！台本ありがとうございましたっ」

「会いたかったっす〜！」

「めっちゃよかったです、あの脚本！」

好意的な歓待で囲まれた。

本人を前に悪口は言えねえのか、  
とりあえず褒めところと思ったのか。

何にせよ ぎよっとなる俺の肩に、背後の宝生がそっと両手を置く。

「やっぱ先輩はすごいですねっつ。みんなのハート、がっちりキャッチーしちゃってますよおっ」

ってさあ。

はは…。

まいっか。

ヘタクソだけど精一杯の コイツのフォローに免じて、さっきのは聞かなかったことにしといてやる。

「俺はコレ持って来たただだから。詳しいことは陶冶から聞け」

そう言っ て宝生にSDカードを手渡し、さっさと出て行くことにした。

「吉良先輩！」

ドアに手を伸ばしたとき、よく通る声に呼び止められた。  
振り向くと、いかにも自分に自信があります的な、やたら堂々とした奴がいた。

「台本、マジいいっす。演るの楽しみです」

別に こいつのために書いたわけじゃねーけど。  
と思いながら「どーも」と答えると、

「どうしても宝生が主役じゃないと駄目なんすか？」

食いつきそうな勢いで問いつめてきた。

同じようなことを何人かに聞かれたけど、こいつが一番実感こもってるな。

「最初にそう言っ たはずだけど」

「大事な大会なんです！」

熱気ムンムンで力説してきた。

「失敗するわけにはいかないんです！ 見て分かるように、宝生はまだ1年で経験ありません。発声だって出来てないし、舞台のことも知らない、精神的にも弱い。見た目も地味だし、すぐ噛むし動作もキョドってるし、主役が務まるとは思えません！」

おお、滑舌いいなーこいつ。

演劇部って感じるわ。

というシンプルな感想を持ちつつ、俺は答えた。

「そんなん、どーでもいいし」

呆氣にとられたように、相手のよく動く口が止まった。

何か言い返してくるかと思って数秒待ってやったけど、どうやら返答が思いつかないようなので、俺はそのままドアを開けて出ていった。

一瞬だけ室内を見たとき、宝生がマックス猫背で小さくなってる姿が目にはいった。

ひょっとして俺のせいで、あいつ 部内での風当たりが強くなっちまっていたり？

…面白えじゃん。

今度聞いてやろう、  
上靴に画鋲入れられてねえか？って。

俺の執筆活動は とても緩やかなペースで続いている。

だいたい毎日 学校にいるとき、好きなだけ好きなように 自分のHPに書いている。

他にブログもやってるけど、そっちは趣味のレース観戦(つつてもテレビで、だけど)のことがメインで、日記と執筆活動の報告もちょこちょこ。

仕事としては、雑誌に掲載している50ページ程度のシリーズものが月に一本。

ネットで有料配信されている長編が一つ。そんだけ。

長編のほうは秋頃に完結予定なので、そのあとどうなるかは未定。次回作は巫女×悪霊もので、みたいなことは言われてるけど、さすがにそろそろ受験勉強しねえとな。

どんな体位にしよう、どんな場所で、どんな道具を使つて。そんなことばっか考えてる場合じゃねえ。

放課後に図書室でブログのチェックをしていたら、珍しく風から書き込みがあった。

『土曜の八耐、マジでスゴかったね。決勝でクラッシュしたとこ目



の前で見ちゃった。 H u s e 』

こいつスズカまで観に行ってたんだ？  
くそー、いいな。

親父さんがレース好きで、時々凧も連れてってもらっているようなのだ。

ちなみに、ここでは互いにレジェンド的ライダーの名前をHNに  
使っている。

『危ねーよな、ギリギリのスタンスだったし。あの段階で仕掛けて  
くると思わなかった！ I k u j i 』

というレスをいれたら、  
すぐに返事が来た。

『コンマ数秒 フラットだったから挑発に乗っちゃったんだろうね。  
タイヤチェンジのあとだったら ああはならなかったのに。 H u  
s e 』

そう、そうだよ！

いつもポワァーーンとしてるのに、車やバイクのこととなると  
凧は超冴えてる。

こいつに影響されて、俺もレースを観るようになったんだよな。

さっそく返事を書こうとしたとき、  
次の書き込みがもう入って来た。

『ところで話しかけていい？ 凧』

「え？」

思わず口に出し、ぱつと顔を上げると、

図書室のドアのところから 凧が顔を半分だけ覗かせていた。

「掲示板のなかで聞くんじゃねーよ、こんなことっ」

直接言え、直接っ！

呆れちまうけど、イラついたりはしない。

俺にしては珍しいけど、なぜか凧には腹が立たない。

コイツの ほんわかオーラがすごすぎて、尖った気分になれないのだ。

「ごめんね。久しぶりだったから ちょっと声かけにくかったんだ」

そう言って、凧は向かいの席にことんと座った。

「でも吉良、元気そうでよかった」

ぼわーんと微笑まれると、なんか癒される。

コイツと直接話すのは半年ぶりだけど、変わってねえなー。

華奢な体型はモトクロスをやってるようにはとても見えないが、いつもどこかに（今は鼻の頭に）絆創膏を貼っている。

ふわっふわで茶色い くせ毛は いつも好き放題あちこち向いていて、

なんだか動物っぽい可愛さ。

初めて見たとき、トイプードルみたいな奴だと思ったつけ。

「もしかして佐野から連絡きたか？」

とりあえず、そう聞いてみた。

凧がわざわざ俺に会いに来るなんて、それしかねえだろ。

果たして奴は、こつくり頷く。

「おれは別に構わないけど。みんなと遊ぶの嫌いじゃないし。でも吉良はどうなのかなと思って」

「何だよ、どうなのかなって」

ぴくつと眉間にシワが寄る俺に、  
のんびり頬杖つきながら凧が言う。

「集まるの、嫌なんじゃないかって。なんとなくだけど」

「んなことねーよ別に。…嫌がる理由、なんもねーしっ」

俺はムキになって答えた。

ほんととはめつつちゃ嫌だけど、それ認めたら　まるで何かトラブルがあつたみたいと思われちゃうし。

そんな俺を　小首をかしげて見遣り、

「吉良、最近なにかした？」

ぼんやりと尋ねてきた。

「は？ どういう意味だよ」

「きみが動くと、おれたちも動いちゃうから」

全く分かんねえんだけど。

同じこと聞くのもアホらしいんで、俺は黙って続きを待った。  
けど。

「今までもそうだったろ？ うーん、でも吉良には分からないかも。台風の目って、自分が中心になって周りが大変なことになってたって 別に気にしないでしょ。ただそういう役目だった、ってだけで」

にっこり微笑まれても！

けっこうひでえこと言われてんだけど！

「誰が台風の目だってえ？」

「そこだけは晴れてるからいいじゃないか。みんなの中心ってことだし」

「中心ってんなら間々原のクソ野郎だろつ。結局あいつが一番 発言力あったし、みんなから一目置かれてた。グルグル回されたのは俺のほうだつつの！まるで乗り物酔いみたく気持ち悪い状況に陥ってんだから！」

そこまで言っちゃってから、後悔した。

風はそんなの知らねえはずなのに、

余計なことまで吐いちゃった。

「そうかな？ おれは違うと思うよ。そうじゃなくて、うーん」  
うまく説明できないのか、少し間をおいたあとに「ごめんね、な  
んとなくそう思っただけでした」と付け足して笑った。

またかよ…。

笑顔がめっちゃ可愛いけど、  
力が抜けるぜ…。風くんよ…。

「吉良先輩」

そのとき、宝生がこっちに駆け寄ってきた。

「あの、あのっ、少しだけ お時間ありますか？実は」  
勢いで口走り、

俺の向かいの席の風に気付いて 飛び上がった。

「あ！ご、ごめんなさいっ。お話の邪魔をしてしまったっっ」

慌ててUターンしようとする宝生に、  
風が声をかけた。

「おいでよ、ここ座ったら？おれはもう行くから」

「えっ！ あっ、でっ、でで、でもっ。でもでもおっ」

俺は立ち上がり、宝生の頭をペンケースでこつと殴った。

「痛あ！」

「どもるな、騒ぐな、猫背になるな。さっさと座れっ」

「は、はひっっ」

椅子をガタつかせてようやく席についた宝生を、  
凧が目をパチクリして見ていた。

「見事に 吉良のS心を満たすコだなあ。どこで見つけてきたの？」

「俺が捕まえてきたみてえに言うなっつの」

呆れる俺に構わず、凧は宝生に話しかけている。

「今度、殴っても痛くない柔らかい棒を買ってきてあげるよ」

「ほ、ほんとですかっ。ありがとうございますっっ」

なんで一瞬にして意気投合してんのかなあ？

「そんな棒で殴っても面白くねえわ」

当然、俺はそう突っ込んでやったけど。

凧がいなくなったあとも、

しばらくの間 宝生は、奴のほんわかウェーブにやられたままだった。

「ほんとに天使みたいだなあ、風先輩って…。俺、近くで見たの初めて。感激ですう」

「はあ？あいつって そんなふうに思われてんのかよ？」

若干驚いて聞くと、

宝生はきょとんとし、まじまじと俺を見た。

「は、はい。ていうか…漢字検定研究会の方々、5人とも有名ですよ。みなさん個性的でカッコイイから、何となく憧れるっていうか…ファンも多いですし」

なんだそれ？？

後輩から見たらそうなんのか。

本人たちのこと詳しく知らねえから、勝手に想像を膨らませてるんだな。

本性を知ったら面白えだろーな。さぞかしガツカリすることだろう。

「ファンねえ。間々原ならそーいうの いそうだけど」

「あ、あの方にはコアなファンクラブがあるんですつ。男子校つてスゴイですよねっつ」

げええ。入ってる奴の顔が見てみてえ！

つか、そんなモノがあるって知ってるってことは、こいつ。

「おまえも入ってたんの？」

若干ム力つきながら聞くと、

「えっ！ お、俺は、えと、…あのその、…いいえっ」

なんだ、その慌てぶりはあー。

否定してるけど、めっちゃ怪しい。

なぜかイラつき、机のうえに置いたハードカバーをこつこつと中指で叩いた。

「…そんで？ なにしに来たんだよ、てめえは」

「あ！ そ、そーでしたっ」

宝生は慌てて立ち上がり、アワアワし始めた。

「ど、どうしよう、だいぶ遅くなっちゃった…！先輩と話すの楽しくて、ついついつ」

ってさあ…、なにをケロッと抜かしてんだか。

間々原のクソ野郎のファンのくせに。

って、俺こそ何 こだわってんだかつ。

「オロオロする暇あったら さっさと言わんか！」

奴の前頭部を平手でばしんと叩いてやった。

「は、はひっ。実は 昨日から立ち稽古に入っただんですが、ちっともつまみづかなくて…原因は、きっぱりはつきりオレなんですが…」。



吉良先輩を呼んで来いと陶冶先輩に命じられまして」

「陶冶が？」

俺の仕事はあくまで脚本を書くまでなんで、

あとのことなんか知らねえ！って突っぱねることは可能だ。

でも、そういうこと全部分かってる陶冶が呼んでるってことは、  
けっこう厳しい状況なんだろう。

俺は仕方なく、本をかばんに仕舞って立ち上がった。

「き、来てくれるんですかつ……？」

「まあ暇つぶしに。この本、もう読み終わってるし」

とたんに宝生は、にこおっと微笑んだ。

「先輩って……そういう本、好きなんですねっ」

いま仕舞ったのは『ライオンボーイ』の2巻だった。

「こないだは西遊記だったし。なんだか……意外ですつ。遠くから見  
たら、サリンジャーとかフィッツジェラルトとか読んでそんな雰囲気  
なのにな」

誰だソレ？

「俺、細かい文字がぎっしり詰まった本は読めねーんだよ。イライ  
ラしてくる」

小説 書いてるから 小難しい本を読んでもらうなんて、短絡すぎるっつ。

「そ、それに先輩、理系クラスですよっ…先日 教室にお邪魔して、びつくりしました。文理両方とも得意だなんてスゴいなあ」

「ぜんっぜん得意じゃねーわ。どっちかつーとマシってだけだ」

俺の国語の成績を知ったら、こいつ引っくり返るだろうな。

とりあえず漢字は ともなく書けん。

ケータイ（＝変換機能）なかったら、小説書こつとも思わなかったし。

そんな俺に構わず、

「オレも今度読んでみよっ…西遊記」

などと言って宝生は えくぼを浮かべて笑った。

演劇部の部室に行くと、前回と比べ物にならない緊迫した雰囲気  
に包まれていた。

部員たちの冷ややかな視線がこっちに突き刺さってくる。

うわ、なんか知らねーけど嫌だー。帰ってえー。

とか後ろ向きな俺に、とにかく観てくれ！と陶冶が言う。

わざわざ自分の隣に俺用の椅子を並べてくれたんで、

やれやれと溜息をつきながらそこに座った。

「そんじゃ、最初っからもう一回な」

陶冶が声をかけ、キャストたちが「はい」どこことなく気の抜けた返事をした。

シンと静まるなか、稽古が始まる。

冒頭の数分間、普通にいい感じに進行していった。

正直、男子演劇部ってどうよ？

と甘く見ていた俺だけど、

アウェイな環境で戦おうって気迫を持っているだけあって、ちゃんとみんな演技できてんじゃねえか。

予想外なクオリティの高さにけっこう驚いた。

が！

主人公登場でイッキにレベルが急降下した。

緊張しまくりの引きつった表情で出て来た宝生は、

せつかく周りが作りあげた世界感をブチ壊し、

まるで地球上に現れた痛い宇宙人のように一人だけ浮きまくっていた。

「こらあ、宝生。腹から声出せー」

隣の席から陶冶がアドバイスした。

稽古の途中で声 かけていーんだ？

流れを止めちまうから黙って観てなきゃいけないのかと思ってた。

注意された宝生は「はひっ」と返事をし、さっきより若干大きい声で続きのセリフを言った。

周りの部員たちから「またかよ」的なウンザリした空気が流れてくる。

バカバカしすぎるのか、失笑している奴もいる。

そいつらにはムカツクけど、

今の俺、それ以上に宝生に腹が立ってる。

怒りでワナワナ震えるほどだ。

なんぼなんでも酷すぎんだろっ？！

「宝生、視線を泳がすなー」

「は、はひっ」

「ふらふらすんなよ。足 踏ん張ってまっすぐ立て」

「はひ」

陶冶が注意し、宝生が答える。

そんな遣り取りがしばらく続き、俺はついに切れた。

ぶちっ！

て音が聞こえた、はつきりと！

気がつけば席を立ち、宝生の背中に飛び蹴りをお見舞いしていた。

どかつ！

ばたん！

見事 ひっくり返ったあいつに、

「ざけんじゃねーっ！！」

考えるより先に怒鳴りつけていて。

「てめえは誰だ？！ ああ？！」

「ひっっ！？ お、オレ…は、ほ、ほうしょう…でふ」

「違えだろうが！このボケ！！」

叫びとともに、座り込んでいる奴の足を 思い切り蹴りあげた。

「い、痛っ」

「今は『タナカ』だろ？！ 陸上歩兵隊 二等兵のタナカ！！ それなのに素のままノコノコ出てきやがって、てめえはなに一つ演じてねーじゃねえか！」

えっ…。

ってカタチに唇が動いたまま、あいつは固まった。

「どういっつもりでソコに立ってんだよ！俺が考え抜いたカッコイ

イ台詞を台無しにしゃがって！これからってトコで観る気 失せさせやがって！」

そこまで吠えて、俺はやっと我に返った。

宝生は震えながら目に涙をいっぱい溜めて 俺を見上げているし、他の部員たちも完全に硬直しちまってる。

しまった。

いくらなんでも暴力はよくなかったか。

「…立て。ちょっと来いっ」

俺は宝生の腕を掴み、立ち上がらせた。

「悪い、陶冶。１０分くらいコイツ抜けさして」

「おお？ おー、了解い！」

部長の許可が降りたんで、宝生を引っ張って部室を出ていった。

「わっ。…ぷ。ぴー！」

と、宝生が 形容しがたい声を上げているのは、俺に水をぶっかけられたからだ。

部室を出てからトイレに直行し、奴のメガネを取って 水道の水を頭にかけてやったんだ。

「てんぱい、な、何をす…ぷは」

ハンカチを顔に押し付け、ぐいぐい拭いてやった。

「ちったあ目え覚めたかよ。背筋伸ばせ、おらっ！」

濡らした前髪をかきあげるように上へ持ち上げ、  
正面にある鏡に顔を向けさせた。

なにも隠すものがなくなった宝生の顔は、  
やっぱハツとするほど美形で。  
鏡のなかで目が合うと、こっちが若干ドキリとするくらい。

けれど中身はあいつなんで、  
途端に目が泳ぎ始めた。

「う。…あのお、メガネ」

「タナ力はしねえんだよ！髪もあげとけ！」

後ろ頭を掴み、よく見えるように鏡に近づけてやった。

「いいか、こいつはタナ力。明るく闊達で、いつも人の輪の中心に  
いるような奴。思ったコトを何でもハキハキ喋るから時々相手を傷  
つけるけど、自分に正直で まっすぐな人間」

「……」

そんなこと、台本を何度も読んでいるはずの宝生には重々分かつ

てんだ。

けれど、俺の口から言うことで 逃げ道を無くしたかった。

「そういう主人公を書いたんだ俺は。きっちり演じろよ」

「……っ」

鏡から視線を逸らせようと、あいつは必死で首をのけぞらせた。

「むり…でふ。や、やっぱ…俺に…は」

「できる」

なんの確証もないのに、なぜかスルリとその回答が口から飛び出した。

「おまえはできる。俺が言うんだから間違いないえ」

「ふ…」

びくつと肩を震わせた宝生は、

ふえええええ！と情けない声をあげて泣きだした。

あーあ、ついに泣いたか。

みつともねー顔しやがって！

でも奴の大きな瞳から涙がぼろぼろ零れ落ちたとき、

鏡のなかのその表情に目を奪われた。

初めて会ったときも感じた。



水飲み場で顔を洗っていた宝生が、なぜかずっと頭に焼き付いて。記憶から消えなかった。

それだけコイツが人の印象に残る…言い換えれば 影響を与える、存在なんだと、

俺のなかのどこかが強く反応したんだろう。

だからってコイツが主役を張れる人間かどうかなんて、今でも分からないが。

「簡単だろ。自分と間逆なタイプと思えばいいんだ」

ふと思いつき、そう言ってみた。

たぶん、きつかけ。

やる気はあるんだから、

何かちよっとした きつかけがあれば、その気になれるんじゃないかと。

「…はひ？」

鼻水をずびずば啜りながら、あいつが首を傾げる。

「タナカは、おまえと全く逆の性格の人間。そう思えば演りやすいね？」

「…確かに、ひつく。タナカさんは…オレが、いいなあって、こんなふうに、なれたらなあって、うつく。理想のタイプ…れす」

「だろ！舞台のうえだけでも、なりたい人間になれるんだ。そう思

「だったらちょこつと楽しくね？」

「あ……」

今初めてソコに気付いた、ってふうに、

「そ、そうかあ」

とあいつは涙で濡れた頬をピンク色に輝かせた。

「お、オレっ、台本100回以上読んだんですっ。そのたびにタナカさんに憧れて、ドキドキワクワクして。喋り方や仕草も、自分にいろいろ想像したんですっ。こんなときタナカさんならどうするか、なんて　ことあるごとに彼に置き換えて考えちゃったりっ」

「いいじゃねえか。そのまんま演じりゃいいんだよ。っしや、戻るぞ！」

「はひっ！」

ちよつとはマシな精神状態になったかつ。

そー思って、メガネは俺が預かったまま　部室に戻った。

しかし。

部室のドアを開けようとしたとき、またしても室内から声が聞こえてきた。

「だから言っただんです、あいつには無理だっ！」

ドアノブに手を伸ばしかけていた宝生の動きが、ぴたりと止まった。

おいおい。

「そうですよっ！これで吉良先輩も分かったはずですが、あいつの演技の酷さが。さっきだって超ブチ切れてたし」

「今ならまだ間に合います。陶冶部長、主役を堤<sup>つみ</sup>に替えましょう」

「やらせてください！タナカのセリフは全部はいつてます。すぐ対応できます！」

この声、こないだ俺に意見してきた奴だ。

こいつら、宝生が降ろされること前提で 密かに先のことを計画していたらしい。

それにしても このタイミングの悪さ。

隣に立つ宝生の顔を見ると、  
思ったとおり、完全に硬直していた。

「…堤先輩、すごい。自分が割り振られた役のセリフも完璧なのに、主役のぶんもゼンブ覚えたなんて…」

関心してどーする！

「あのなあ、宝生」

「や、やっぱ…オレなんかより、堤先輩がやったほうが…」

消え入りそうな声で呟くあいつの目から、  
やっと止まっていた涙が　また一粒ぱとりと落ちる。

このバカがつー！

俺はカツと頭に血が昇り、  
自分でも信じられない行動に出た。

宝生の襟首を掴み、ぐいっと引き寄せ、  
唇を重ねた。

今なにかしねえと、  
こつちを向かせないと、

また宝生が暗い泥のなかに埋もれていく前に、引つ張り上げねえと。

ただ、そう思って。  
全くのノープランで、  
とっさに出た行動だった。

普段の俺なら死んでもしねー、こんなこと！  
人並み以上に嫌悪感持つてんだから！

なのに今は、ごく当たり前なことに思えた。  
コイツを何とかしたいという自分の気持ちだが、素直に態度に出た。  
ただそれだけのことだ、と。

軽い音をたてて唇を離すと、  
あいつは零れ落ちそうなほど目を見開いていた。

「スイッチ入れたから」

きっかけ。

もしコレがそれになるなら。

「おまえはできる。つか、おまえがタナカ。生み出した俺が言うんだから間違いないえ！」

じつと見つめていると、

青ざめていたあいつの顔に だんだん朱がさしていった。

同時に、凍り付いていた表情が緩んでいく。

ドアの向こうからは、相変わらず 主役交代を要求する部員たちの声が漏れ聞こえてくるけれど、  
やがて宝生はふわりと笑った。

「ほんと、吉良先輩って…むちゃくちゃだなああ」

さっきまでと別人のような雰囲気にとキツとする。

もちろんそんな顔に出さず、

「なんか文句あつか!!」

勢いよく吠え付いてやった。

あいつは、

「いいえ」

小さいけれど、はっきりと答えた。

「ありがとございますっ。なんか…今ので自信 もらっちゃったかも」

俺は頷き、勢いよく部室のドアを開けた。

「待たせたな！ おらおらあ、てめーら 無駄話してねえで もっかい最初からだ！」

突然 高飛車に命じる俺を、部員どもがポカンと見る。

陶冶だけは「ぶははっ」と大笑いしていた。

「しょうがねえなあ。超ワガママな脚本家先生たつてのリクエストだ。叶えてやっかー」

いつものユルい調子でそう言って、部員どもに指示を飛ばした。

そのあとの立ち稽古で、宝生の様子に全員が驚くことになる。

演技力は他の部員の足元にも及ばないし、

声も、動きも小さい。まだまだ舞台のうえでやれるような所作じゃない。

けれど、堂々としている。

さっきまでのオドオドした様子が微塵もなくなり、背筋がぴんと伸びているし言動に迷いがない。

加えてあのルックスだ。

真ん中で ちゃんと立ってるだけで存在感がある。

「宝生、そこはもうちょい間を空けて」

「話しながら ゆっくり前へ出る。うん、そんな感じ！」

陶冶からのアドバイスも、さつきよりずっと踏み込んだ内容になっている。

いつの間にか周りの部員たちも真剣に稽古を見つめていた。  
ヘタクソだけど、あいつの一生懸命さが伝わるから目が釘付けになるんだろっ。

「どんな魔法をつかったんだよお、キラちゃん」

目の前の役者たちに視線を固定したまま、陶冶がニヤニヤ笑う。

「あいつ、なんで演劇部にはいったんだ？」

俺も前を見たまま、質問で返した。

回想シーンにはいったところで、  
しばらく出番のない宝生は端っこに引っ込んでいる。

「大勢のまえで何かやるとか、苦手なくせに。引っ込み思案で気弱なくせに。なんで？」

陶冶は何も答えなかった。

稽古を見てる最中なんで、そっちに集中してんだろっ。

こっちも別に返事を催促しなかったんで、

「姉ちゃんに負けたくねえから、つつてたなあ」

だいぶ後になって そう言ってきたときには、  
なんのこっちゃ？と思っちまった。

「あいつの姉ちゃん、演劇部なんだよ。しかも紅凜女子高の3年。<sup>「ウレン」</sup>夏の大会で見れるぞあ、おまえも来いやー」

それって、前に陶冶が言ってた こいつらの天敵か。

男子高のくせに演劇部なんて、っていつもバカにしてくる、毎年優勝している女子高。

「陶冶は知ってんのかよ。どんな女？」

「それがさあ、吉良ちゃん並みにキツツイ性格！いつもケンカごしで超こええんだじえー」

「俺を並べんなっ」

どかつ。

足を踏んずけてやった。

「アウチ！ 気持ちイイ〜」

ちっ。つまんね。

こいつマゾだった。

にしても、宝生にそんな姉がいたとは意外だ。

「姉弟なのに性格は全く違っってわけだ？」

「顔は激似だじえ〜。今みたくメガネ取って髪上げると よく分かるわなあ」



「そーなのか？」

ちよつと興味を引かれた俺に、  
思い出したつてふうに陶冶が付け足す。

「ああ、なんなら検索すればあ？一発で出るじえ」

「何が？」

「宝生の姉貴。HND48とかいうグループに入つてっから」

はあっ？

それつて あの名な作詞家がプロデュースしているアイドル  
グループから派生した、  
この地区の女の子たちで結成されたアレ？

「早く言え、バカヤロー！」

驚かされたことに腹がたち、思わず怒鳴つちまつた。

稽古中だった部員たちがビックリして動きを止めちまつたんで、  
「あ、悪い」慌てて謝つた。

宝生も不思議そうにこっちを見たけど、  
すぐに演技を再開した。

タナカになりきっているあいつの横顔を眺めながら、  
俺はポケットに仕舞つておいたメガネを手にとってみた。

だから顔を隠したがつたのか？

超有名なアイドルと姉弟ってこと、知られなくなかったから？

詳しいことなど なんも知らないけど、知ろうとも思わねえけど、ただのガラスが嵌った このメガネを通して、あいつの気持ちが見えて見えた気がした。

最後まで通したあと、意見交換会みたくなった。

ざっくり全体の流れを見て、修正すべき箇所や気になる部分をあげていく。

いくつか意見を求められたけど、

俺から告げることは もうなさそうだった。

部員のみんなは脚本の内容をすっかり掴んでくれてるんで、あとは自由に書き換えてくれって感じ。

主役を替えようという意見も、もう とりあえず出ないようだし、途中で退室させてもらうことにした。

「あつ！ き、吉良先輩っ。ありがとうございましたっ、あのっ、オレ、ホントいろいろ、あんなことまでっ、」

げー！

「いいから！」

俺はぎよっとなって 大バカ者のダダ漏れな言葉に大声でかぶせた。

「はつきり言つとく！おまえの演技は小学生レベルだ！　また見に来るから、そんなとき今より成長してなかったら百叩きの刑だかな！」

「ええつ、ひゃ、百つ！！　そ、それは困るんで、がんばりまふっ」

ふん。

鼻息で答え、預かっていたメガネを奴に突き返した。

そのまま部室を出て、下校するため一旦自分の教室に戻ったわけだが、

今頃になって、俺　何やってんだろ？と思った。

いくらこつちが指名したとはいえ、あいつが主役になろうがなるまいが、どーだっていいのに。

面白そうだから　そんな条件を出してみただけで、こつちから協力する気も手を貸すつもりも　さらさらなかったのに。

キスとか、なんでしちまったんだ？

でも嫌じゃなかった。

自分からしたんだから　当たり前なんだろうけど。

全然違った。

…間々原と。

奴　関連で　また嫌なことを思い出しそうになり、

俺は首をぶるんと振ってソレを追い払った。

最初は、出会えてよかったと思っていた。

たまたま掃除当番が一緒だっただけで、  
こんなにも気の置けない仲間が出来るなんて、  
すげえラッキーだと。

俺にとってこの高校は、ダメモトで受けたC判定の学校だった。  
不合格だったときは、やっぱなー！って自分も周りも大笑いした  
もんだ。

ところが後になって補欠合格の知らせが届き、みんな揃ってひっくり返った。

その時点で 親しい奴らと ことごとく別れちまって、ほとんど  
友達なしのスタート。

しかも補欠で入った事實は、ことあるごとに自分だけ格下なんじやねえかって 勝手な思い込みに繋がったため、  
自分から周りに溶け込んでいく勇気をなくしてた。

背中に「補欠」って書いてあるわけでもねーのに、そんな目で見られてるんじゃないかの、勝手な劣等感。

授業についていくのも大変だったし、分からないところがあっても誰にも聞けなかった。

俺が頭悪いのバレちまうんじゃないかって、ヘンなプライド。

そんな中でできた友達だったから、なおさら嬉しかった。

5人とも古い映画が好きという共通点が わりとすぐ判明したん

で、

週末にレイトショーを観に行くのは恒例になったし、そこから派生して演劇やミュージカル、レースやスポーツ観戦、美術館、博物館。

誰かの趣味が 他の奴らに どんどん影響をあたえ、どんどん広がっていった。

陶冶が部室にテレビを持ち込んでからは、昼休みのたびにDVDを見るようになった。

とはいえ 音が漏れたらマズインで、片方づつイヤホンをつけて交代で聞く。

およそ快適とはいいがたい不自由な環境なのに、校内でこっそり見てるってことが俺たちのワクワク感を倍増させた。

あるとき、陶冶が演劇部をつくると言い出し、いつか舞台監督になりたいと打ち明けた。

つられて他の奴らも将来の夢なんかを口にした。

凧はモトクロスのフリースタイルのプロライダー。

間々原は親が経営してる会社を継ぐと抜かして周りを白けさせ、つまんねー！と俺が突っ込んだ。

佐野は：なんだっけ？ あいつ黙ってたかも？

俺は小説家になりたいと宣ってやった。

真剣に考えていたわけじゃない。

なにかデカイこと言って、すげえなあ！って反応が欲しかっただけだ。

こんなときにも俺のヘンな負けん気が出ちまったのは、自分だけ補欠つてことに まだ拘つてたのかもしれない。

でも もともと物語を転がすことは好きで、  
退屈な授業中とかに よく、4コママンガならぬ4行ストーリー  
をノートの端に書いていた。

？ 結婚式の最中に大地震

？ 花嫁が入れ替わっている

？ 隣の式場の花嫁だった

？ 自分の花嫁は死んでいた・隣の式場の花婿も死んでいた・しょうがないので隣の式場の花嫁と結婚式を挙げた

みたいな。

こんなことがあつたら面白えよな、  
有り得ねーけど笑えるよな、というイロイロを考えるのが大好き  
なのだ。

そのとき ちょうど、ウケを狙ってエロ小説を書いていたから、全員に回して読んでもらった。

今はこんなん書いてっけど、そのうち超やべえ大作を書くからさ！  
なーんて、全くそんな予定などないくせに 堂々と大ボラ吹いた  
っけ。

読んでもらったエロ小説は大好評で、続きを書け！と4人ともか

らオファーがきた。

請われるまま、面白がってどんどん続書きを書いているうちに、いつのまにか陶冶がソレを出版社に送りつけていたわけで。

いきなり家電に『弊社から配信させて頂きたいのですが』という電話がかかってきたときは、顎が落ちるほど驚いた。

『なんだよ陶冶、このペンネーム。ブラック・パールて！』

『いやああー、うへへっ。ウチの近所にあるフィリピン・パプの店名。キラちんの小説ん中にフィリピン女性が出てきたから、これでいいかなあーって』

『そいつが登場したの、たった3行じゃん！』

という　ひと悶着はあったものの、  
未だペンネームは変更していない。面倒なんで。

一作目の売れ行きが意外に好調だったらしく、すぐに次回作の依頼が来て、

『なんかアイディア出せっ！』

4人に泣きついた。

なので　あの頃は、依頼を受けるたびに漢研の部室に集まり、俺のエロ小説の内容についてみんなで会議していた気がする。

あれはあれで楽しかったんだ。

4人ともけっこう　とんでもねーエピソードを出してくるんで、それを拾って文章化するのも、書いたものを読んでもらうのも面白かった。

『なあ間々原。ちょっと実演してやんね？キラちゃんも 実際に見た  
ほうが書きやすいだろうし』

佐野があんなことを言い出すまでは。

でもって間々原が『いいよ』と軽く応じるまでは。

『このシーンだけど、やっぱり後ろからのほうがそそるんじゃないか  
？』

そう言って佐野は間々原を後ろに立たせ、片手に持った小説のコ  
ピーを読んだ。

『見て、あんなに太陽が赤い。もう行かなくちゃ…これ以上お父様  
をお待たせ出来ないわ』

外は真昼間で、まったく夕焼けじゃなかったが、佐野は窓に両手  
をついて空を見上げた。

その背中を間々原が抱きしめる。

『嫌だ、離したくない。父上に撃たれても構わない』

まったく躊躇ナシなんで、見ているこっちが恥ずかしい。

『こいつら、よおやるわ。羞恥心 ねーんかな？』

隣でポテチをぱりぱり食っていた風 に こっそり耳打ちすると、

『書いたのは吉良でしょ？』

ケロリとした顔で返された。



いや、そーだけど。

こいつも大概だな…。

『だめよ、ギルバート叔父様』

ちなみに、この小説の設定はドイツで、第二次世界大戦らへん。  
上官である兄の孫と寝ているヘンタイ男の話だった。

『ではエリザベス。せめて太陽が沈むまで』

『叔父様ったら。あれが沈むのに10分とかからないのに』

薄く微笑んで佐野が言う。

こいつって異様に女役がハマるし、ビックリするほどの演技力の  
持ち主。

これまでに　ときどき有名な映画のセリフを諳んじて　陶冶をと  
きめかせ、

『佐野さまあ！演劇部に入ってええ！』

としつこくスカウトされていた。

けど　いつも断ってたっけ。

演劇部が嫌だというより、

佐野には部活に入る気が　そもそも全くないみたいだった。

『1分でも1秒でもいい。おまえの蜜を味わい尽くさせておくれ』

セリフを読みながら　間々原は佐野の顎を斜め後ろに向け、  
覆い被すように顔を重ねた。

げええ？！こいつら、マジでキスしてね？  
思わず声を上げそうになった。

俺の位置からだ、間々原の後ろ頭でよく見えない。  
ドラマとかでたまに見る、なんちゃってキスだよな。  
きつとそうだ、そーに決まってる。

隣の尻を見ると、相変わらず顔色ひとつ変えずに二人を眺めてい  
る。ポテチを齧りながら。

尻が平然としてんのに、俺だけ騒ぐのも何かシヤク。

そう思っでぐぐつと言葉を飲みこみ、目の前の光景を見守ろうと  
したけど。

佐野が左手を回し、間々原の髪に埋める。

その指の動きが 妙にヤらしいし、間々原の両手が佐野のシャツ  
の裾から侵入し始めたし。

そりゃ確かに小説のなかでは、このあとギルバートとエリザベス  
は 夕陽が沈むまでの僅か10分の間に 服も脱がずに忙しく激  
しいセックスをする展開だけど。

どこまで再現する気だ、てめえらは！

そのうち佐野は、ほんとに感じてるような息づかいになってくる  
し。

間々原の手は、ドコ触ってんだ？！って角度で服のなかに入って  
蠢いてるし。

もう、シヤクだとか何とか言ってる場合じゃねー！

『いー加減にしとけっ、おまえら！！』

俺はついに大声でストップかけた。

その途端、二人はあっさりと離れて 観客である俺と凧に笑顔を向けた。

『参考になったか？』

間々原が言う。

あ、なんだ…。

マジでそのためにやってくれてたんだ？

『まあ、うん…。確かに 後ろからのほうがいいかも』

『あ、ポテチ！凧ちゃん、俺にもちょうだい』

佐野が明るく言っつて、俺と凧の間に座り込んだ。

全くいつもの様子に戻った二人に、心底ホッとした。

それに、実演してもらって分かったけど、  
だんだん陽が沈んで暗くなっていく窓に手をついた女を 後ろか  
らやるシチュエーションはなかなかいける。  
色彩が頭にぱっと浮かび、ビジュアル的にもいい。

結果的に 実演してもらってよかったと思っちまうんだから、人間という生き物は 驚きの出来事にも慣れていけるものなんだな。

それ以来、たまに『小説の参考』と称し、実演して見せてくれるようになった。

昼休みは時間がないんで、ソレをやるのはいつも放課後。

そして間々原が部活をサボったとき限定。

演劇部で忙しい陶冶は、幸か不幸か常に不在だった。

言い出すのは必ず佐野で、相手役はたいてい間々原。

佐野の演技はいつも真に迫ってて、

こいつマジで間々原に惚れてんじゃね?! って、見るたびに俺は惑わされた。

ごく稀に、凧と間々原のペアのときもあった。

その場合も 指示を出すのは佐野だ。

『凧ちゃん、このシーンなんだけど、ちょっと間々原と絡んで見せてくれる? 立ってるだけでいいから』

てな具合に。

凧のヤツもいったい何を考えてるか分からないが、大人しく言いなりになっていた。こいつの場合、なにか頼まれて拒否ること自体めったになかったけど。

それに まあ、服を脱ぐわけでも ホントにやっちまうわけでも ねえし…。

まあ、つまりは単なる遊びだったのだ。

間々原には常に入れ替わり立ち代わりカノジヨがいたみたいだし。

でも一度だけひやりとしたことがある。

高校生同士のスワッピングカップルが出てくる話の続編を依頼されたときで、

『3Pの強姦シーンを入れようよ』というアイデアを佐野が出したときだ。

『実際にやってみよーぜ。キラちゃん、ちゃんと観てなよ!』

例によって佐野が指図し、間々原と二人で風をレイプするという場面を演じて見せようとした。

『どうする、床に押さえつけるか?』

『四つんばいにしたほうが刺激的じゃね?』

『風、もっと本気で抵抗しねえと』

あーでもないこーでもないって意見しあってるうちはよかったけど、

実際にやりはじめたら、だんだん怖くなってきた。

押さえつけてる二人の目が異様にギラギラしてるし、  
風がマジでジタバタ暴れてるように見えたし。

間々原のヤロウは、どこまでやる気だ? ってヒヤヒヤするまで辞めなかったりする。

このときもそうで、奴は風のズボンのなかに手をつ突っ込もうとし

ていた。

ベルトを外すまでなら　これまでもやってるけど、中身を触るとなると　下手すりゃ法に反するっつの！！佐野ならともかく（って言うのもヘンだけど）それ風だし！！

『おいっ、間々原！ストップ、辞めだ　辞めー！』

俺は立ち上がり、間々原の襟を掴んで引っ張った。

びくともしなかったけど、

奴はすぐに風から手を離れた。

『大丈夫かよ、風っ？』

間々原を押しわけ、下にいる風の様子を見ようとした。

しかし、奴は。

『え、なにが？』

ケロリとした顔で、ぴよんと起き上がった。

『や、その…どこも怪我してねえ？』

『何言ってるの、吉良。そんなわけないだろー』

あはは。とか笑われたし。

『それだけ迫真の演技だったってことだな』

間々原もくすくすと笑う。

『俺ら、キラっちのおかげで俳優になれるかもね。3人でデビューする?』

などと佐野に言われる頃には、もう後悔してた。

ストップかけなきゃよかった!くそお!

こいつらといると、時々 自分だけガキっぽというか、余裕がないというか。

一人だけヒヤヒヤしたり 慌てたりしてるみたいで、ちょっと悔しかった。

だからかな。

間々原の誘いに乗る気になったのは。

それは去年の夏。

珍しく佐野も風も用事があって不在で、二人だけで漢研の部室にいた。

俺たちは、いつものようにイヤホンを片耳づつはめて映画を観ていた。

間々原が喫煙するんで、やたら室内が煙っていたのを覚えている。

その頃 俺はミスタービーンにはまっていて、第6巻が観たい気分だったんだけど、

間々原が >風とともに去りぬ< がいいと言い張るもんだから、ジャンケンして、負けて。

仕方なく 髭面オヤジ&化粧の濃い女の恋愛映画を観ることになった。

まあ、ベタベタした内容じゃねえし、主要人物が二人とも 気が強くてスパツとした性格なんで、観ていてイラつくことはない。

そいつらが熱烈なキスをする有名なシーンのとき、

吸っていたタバコを携帯灰皿に押し付け、間々原が言い出した。

『吉良。小説では何度も書いてるけど、実際にキスしたことあるのか』

『ないけど。別に支障ねーし』

『経験させてやるつか。そのほうが実感のこもった文章が書けるだろ』

何 言い出すんだ、アホが。

そう思うと同時に、

ここで嫌だと突っぱねたら、また笑われるんじゃないかと思った。

キスする勇氣もねえのか、

なにを怖がってるんだ、みたいに。

それだけでなく佐野とコイツは、…ときどき風も、俺の目の前でイロイロ実演して見せていて。

いつも見ているだけの傍観者な俺は、3人に比べて そういう行為に遅れているというかついていけないというか、置いてけぼりになってる気は、うつすらとしていた。



だから頷いちまった。

『してみろよ』

間々原は口元に笑みを浮かべ、  
すぐに俺を引き寄せてきた。

初めてのキスがコイツになるとは、想像もしてなかった。

触れた瞬間、キモっ！って思いつきし引いた。

なんだこれ、なんだこれっつ。

それなのに下半身がゾクゾクしてくる。

『べロ出せ、吉良。こんなのキスといえないぜ』

『はあ?! …っ、ふ!』

嫌だ、キモイ!

タバコ臭え!

ぬるぬる、ねちよねちよ、

こんな深いキスするの、エロ小説に出てくる架空の人物だけじゃねえの?!

一般人もすんのかよ?!

そんなことでパニックってた俺は、

やっぱ かなり相当ガキだったんだろう。

間々原の手がシャツのなかに入ってきたときには、  
身体がぐにやぐにやで口々に抵抗できなくなっていた。

胸やら腹やら二の腕やら、好き放題に触られて。

『ちょ…、待て、ストップ。どこまで、実演する気だよっ』

『相当たまってるな、吉良。もう勃起してる』

言われた直後、奴の手がズボンのなかに侵入していた。

『おい！ わ…っっ』

その手から逃げようと身体を捻ると、  
のしかかってくる間々原の重さに耐えきれず、気がつけば仰向け  
に倒れていた。

もがく前に、もう俺の両手は まとめて奴の左手に掴まれている。  
何が起きているか把握できないまま、  
ズボンのなかのアレは 奴の右手に握りこまれていた。

『ひっ！』

『おまえのって、こういう色で こんなカタチしてたんだな。かー  
わいい』

奴は言葉で煽りながら、カタチをなぞるようにゆっくりとソレを  
撫でる。

『きさま…っ』

『他人の手で扱かれると超感じるだろ。参考になったよな？ おまえの先っちょ、もうびしょ濡れだし』

『…っつ。くそ、離せ、ヘンタイ』

『たまらないな。負けず嫌いで、いつも精一杯 虚勢を張ってるおまえの そんな姿。なあ吉良…考えたことある？ あんな小説書いてる おまえを想像して ハチ切れそうになってる読者がいること』

カツコイイと思ってた。間々原を、心の底では。  
俺にないもの全部もってる。

悔しいけど イイ男だよな、っつて。けど。

そんな薄い憧れは、この瞬間 木っ端微塵に砕けた。

ワケわかんね…、

こいつ怖い。

知らなかった、気付かなかった、こいつ変。

恐怖心は増すのに、

下半身のアレは 奴の手で弄られてどんどん張り詰めてく。

このヤロウ、なんでこんなに手コキ上手なんだよっ！

俺の感じるトコ全部わかってるみてえ。

…っつて、おなじ男だからか？

『ガマンする顔もいいけど、吉良がいくトコ見たい』

手のなかのモノが限界近いのを感じ取ったのか、間々原が囁いた。

『見せろよ』

『やだつ。てめーに、なんか！ 死んでもつ、い、や、だ！』

部室のまえの廊下を走る足音が聞こえてきたのは、そのときだった。

バタバタバタ…。

間々原は半目になって俺を見おろしたあと、自分がズリ下げた俺のズボンを 手早く元どおり引っ張りあげた。

直後、ボタンとドアが開き、

『なあなあ、ここに俺の > Stand by me < あつたよなあゝ！？』

大騒ぎしながら陶治が駆け込んできた。

俺たちには目もくれず、DVDが並べてあるカラーボックスに直行する。

『文化祭でやりてーのよお。あれって男子校にピッタリじゃね？なんせ女のコが出てこねーんだじえ』

ブツブツ言いながら陶治がDVDを物色してる間に、俺は慌ててズボンのチャックをしめた。

見つけたああー！！

と陶治が喜びの声をあげる頃には、かろつじてパニック状態から脱していた。

『初めてコレ観たとき、自分の気持ちにリンクしてて震えたなあ。みんな一度くらい考えねえ？ 気の置けない仲間たちと共にどこか遠くへ旅立ちたいって』

青臭い。

というより、緑色かなあ。

陶治が言う。

『うちの学校って、色に喩えたらゼツター緑だろ。しかもブリリアントグリーン。若くて苦くて、あふれ出しそーな。この映画のイメージと超シンクロしてるよなっ』

にへつと笑って、奴はDVDを掴んで立ち上がる。  
そこでようやく こっちをしげしげと見た。

『？ おまえら何してたの？ テレビ止まってんじゃん』

しまった。とつくに映画終わってたんだ。

俺が言い訳を探す前に、

『次は何を観るかで 揉めていたところだ』  
間々原が答えていた。

『吉良はコメディがいいって言い張るけど、俺は泣ける系が観たい』

んで』

むかー！

あんなことしといて、平然としてやがるのが実に憎たらしい。

『ぐははっ！ おまえら趣味あわねーもんなっ』

ズバツと指摘し、陶冶が大笑いした。

『けどママっち、キラが泣ける映画苦手なの知ってるっしょ？ いっただっけ、>フランダースの犬< 観てたとき、このヒト テレビのプラグ引っこ抜いたじゃん。ビックリしたじえーあんときは』

『そうそう。>世界中< のときなんて、勝手に >スポンジボム< のDVDに入れ替えちまったもんな。あれはウケた。さすが吉良って感じ』

こいつらあー。

目の前にいるヒトをエサに盛り上がってんじゃねーよっ！

だいたい、なにが楽しくて わざわざ悲しい気分になる映画なんか観なきゃいけねんだ、

そっちの感性のほうが俺には理解できんわ。

心んなかでほぼ全人類に向かってクレームつけてたら、

「そんじゃ！ 邪魔したなっ」

って陶冶が部室を出て行こうとしたんで、俺も慌てて後を追った。

間々原と二人きりという場所から逃げたかったし、  
こんがらがった自分の感情を落着けたかったためもある。

『あれっ？ 映画観るんじゃないの？』

不思議そうに振り向く陶冶に、  
咄嗟に尋ねた。

『どんな色だっけ？ ブリリアントグリーンで』

『部室の壁の色じゃん。俺が塗ってやっただろぉ』

『ああ、あれか』

秘密基地だ、と決めた翌日には コイツもう塗ってたよな。

そのうえから みんな次々とポスターやら旗やら貼りまくったんで、

今じゃ ほぼ80%壁なんて見えないが。

『ただの緑と違うんだじえ、きらつきらなんだ。おほっ、キラちゃんの名前が二個も入っちゃった』

などと言って、陶冶はへらへら笑ってたけど。

俺には全くピンとこなかった。

自分の高校生活がそんなキレイな色だとは思えねえから。

部活にも所属してないし、女子と付き合うこともなく、青春っぽいナニカとはまるつきり無縁。

どっちかつーと薄暗い色のほうがあってる。

しかも、たった今　ますますグレイになる出来事があったばかりだし

そのあと俺は、しばらくの間　部屋に通っていた。

間々原のヤロウにはムカついたけど、  
いろいろな面でパーフェクトな　あいつにも一時の気の迷いくらいあるだろうと、  
百歩譲って　なかったことにしてやる！って思ったんだ。

それに、あのあと奴は全くいつも通りだったし。

これまでと同じように昼休みは5人で集まり、くだらない話題で騒ぐ。

放課後は陶冶抜きで、4人で映画を見たり　小説のことを話したり。

まるで何もなかったようだった。

もしかしてアレは夢だったのか？と思うくらいの平常。

でも、

そんなの錯覚だった。

二人きりになると間々原が豹変することが、すぐに発覚したから。

他の奴らがトイレに行ったり、飲み物を買いに行ったりする　ちよつとの間でも、奴は絶対にその機会を逃がさなかった。

触ってきたり、キスしてきたり。



ワケわからん言葉で俺を煽りながら。

そんなことが2、3回続けば、さすがにキレル。

とはいえ、こっちの分が悪すぎ！

こんなコト誰にも相談できねー！つか、信じてもらえるかどうかさえ分からない。

二人きりじゃないときには、そんな気配 億尾にも出さねえんだから。

力でかなう相手じゃないし、頭の回転だってカンペキ負けてっし。

俺に出来ることなんて、部屋に近寄らなくすることくらいだった。

居心地のいい場所に行けなくなるのは残念だし、イジメに負けたつか、セクハラに屈したつか、まるでこっちが敗者みたいで悔しかった。

けど カマ掘られる危険度に比べたら、そんなん些細なことだ！  
間々原ならマジやりかねん！！

そして、因果なもので この屈辱的な経験が役立つこともあった。  
ちょうど締め切りが迫っていた短編に、何にもアイデアが閃かなかった俺は、

奴から受けた仕打ちを かなりそのまま小説にした。

実際に自分が体験したことなんで、文章に起こすのは簡単だった。

もの書きの因果なサガってやつ？

転んでもタダじゃ起きねー！つか、

そんなくらいメリットがあっただっていいだろ的な。

そうすることで図太い人間になれた気がしたし、俺じゃない架空の人物がされたこと、なんて無理やり被害者を転嫁し、自己処理していた。

それで平穏な日常が戻ってきたと思っていたのに、半年ぶりに会ったあのクソヤロウが、なんも変わってなくて唾然とした。

つかビビった。

どうしろってんだよ…。

ケータイを見ながら、俺は重い溜息をついた。

画面には、ついさっき佐野から送られてきたメールが。

『漢研のみなさんへ 次の土曜、午後から部室に集まることに決定！ 半年ぶりに5人全員揃う記念すべき日なので、もしも来ない奴は罰として全員のお願いを一つつつ叶えること。』

陶冶とキラ、なんか二人で楽しそうなことやってんね？そこところ、詳しく聞かせてもらおうよ』

ちょっと前に、都合のいい日をメールで聞かれていた。

どうせドタキャンするつもりだったから、いつでもいいって返事したっけ。

まさか 行かねー奴に罰が下るとは。

佐野のヤツ、勝手なルールくっつけてきやがって。

でも、まあ…、ようは あのアクマと二人きりにさえならなきゃいいんだ。

陶冶も来るみたいだし、大丈夫だよ、な。

了解、と書いたメールを送信したとき、最終下校時刻を告げるチャイムが鳴った。

もうこんな時間か。

俺は読みかけのハードカバーを閉じた。

放課後は図書室で過ごすことが多い。

家にはロクに本がないし（マンガはあるけど）、つつい楽しいなほうに流れてゲームばっかやっちゃうんで、

漢研に行かなくなってからは ほぼ毎日来るようにしていた。

いちおう小説書いて報酬をもらっている身なので、本は読むべきかなと。

こんなふうに書くと、勉強のためみたく聞こえるけど、

もともと物語というものが好きなので、読み始めるまでは億劫だけど だんだん夢中になる。

つつても、俺が読めるのは ほぼ児童書かノベルスだけ。

図書室を出て、

昇降口のところで陶冶と鉢合わせた。

「おつ、キラちゃんじゃーん！ 珍しく遅えなあ？」

「まあね。けっこう勉強してんだぜ、俺はー」

「それにしちゃカバンが軽そうだじえ？ 空っぽの弁当箱しか入ってねーだろお」

「うるせえな、そっちこそだろ」

「適当なこと言い合いながら靴を履き替え、俺らは並んでグラウンドに出た。」

「演劇部、いま終わったのか？」

「うん、まあ いちおー」

「大会って再来週だっけ。稽古は順調か？」

「そーさなあ、とりあえずはなー」

さつきから返事がめっちゃ曖昧なんだけど。

俺が立ち稽古を見た日から、二週間くらい過ぎていた。

あれから宝生が俺に会いにくることもパタツとなくなっただけ、多少気になっていた。

けど、こっちからわざわざ様子を観に行くとか有り得ねー。

きつと順調なんだろうと判断し、放っておいた。

どうせ なにかトラブったら、また泣きついてくるだろうと。

期末テストがあつたし 小説の締め切りもあつたんで、俺的にもバタバタしてたし。

「何だよ、なにかあつたのかよ?」

さつきから陶冶の態度が らしくないんで、つい聞いちまった。

「わはははっ!ごめんごめん。やっぱり不自然だったあ?」

奴は笑いながら頭をかいた。

「いやさあ、俺って根が素直な人間なもので、言いたいこと我慢すんの苦手なわけよ」

あーそうですねー。

淡々と受けて、俺は先を促した。

「また宝生が問題かかえてるとか?」

大当たりらしく、陶冶は親指を立てて見せた。

やっぱか。

思わず はあ、と重く溜息をついた。

「で、今度は何。どんなトラブル起こしてんだよ、あいつは」

ところが、陶冶は答えずに校舎を指差した。

しばらく返事を待ってみたけど、その仕草を繰り返すだけだ。

「殴っていいかぁー？」

イラつときて聞くと、「いいよぉー！」って嬉しそうに。  
こっちの手が痛えだけとか、アホくさいんで ヤメた。

「言いてえのか言いたくねーのかハッキリしろっつもの！」

「いやー、キラちゃんには言うなって口止めされてるんで、言いたくても言えねえんだよねえー」

は？

あいつの意思あるニュアンスに、今度こそ俺は首をかしげた。

無意識に、陶冶が指差したほうを見遣る。

「…用事を思い出した。俺、ちよつと戻るわ」

そう告げると、陶冶はあっさり片手をあげた。

「そっか。んじゃ、俺 先に帰るなあー」

俺たちは互いに背を向け、別方向に歩き出した。

ああいつの、口が軽いとは言わねえのかな。  
確かに喋ってはいないけど 結局バラしてんだから、  
同じことのような気がする。

でも陶冶のやり方は正しいと感じる。常にマトモだし、他人を傷つけない。

ちゃらんぼらんだけど、日和ってない。信頼できる奴だ。

演劇部の部室に近づくにつれ、宝生の声が聞こえてきた。

この棟には もうほとんど誰も残ってないんだろう。

俺の足音が響くくらい 静まり返ってるんで、声がよく通るのだ。

ドアを開けなくても分かった。

みんな帰って 誰もいなくなった部室で、あいつは一人だけ残って稽古してるのだ。

奴の演技がダメダメなのは、声を聞いているだけでも分かる。

自信のなさで迷いが伝わってくるから。

おいおい、何やってんだよ。

また振り出しに戻っちまったのか？

カツときた俺は、よっぽどドアを開けて怒鳴りつけてやるーかと思っただ。

いつものように頭を叩いて、湯をいれてやりてえー！って。

でも陶冶に口止めしてるってことは、一丁前に 俺には知られなくねえわけで。

ドアに伸ばした手をぐぐつと引っ込めた。

そのとき、

「こらっ、宝生。声が出てないぞっ」

いきなりあいつが叫んだので、驚いて数歩 後退った。

どうやら自分で自分に突っ込みをいれたらしい。

「おまえはもう、発声からやりなおしだっ」

って…おいおい。  
どんなプレイだよ。

こっそり聞いちゃったこっちのほうが 恥ずかしさに悶えちまう  
だろーが！

「あ、え、い、う、え、お、ああ！」

バカデカイ声を聞きながら、頼むよーと思った。  
この調子で「ん」までやる気か？

ヘタすると、「よしっ、次は早口言葉だ、宝生っ」とか言い出し  
かねない。

痛い、痛すぎる 。

つか…、

あれから二週間、コイツずっと一人で残って練習してたのかな。

宝生なりに、なんとか自力で解決しようと頑張ってたよな。

ここで俺が声をかけたら、水をさすことになる。

ていうか、今の痛い一人突っ込みを聞かれたと知ったら、あいつ  
マジで悶え死ぬかも。



俺なら悶え死ぬ。

結局 そのまま帰ることにした。  
見なかったことにしておこう。たぶん、そのほうがいい。

だけど、あいつの発声練習は いつまでも俺の耳に残ってた。  
布団にはいつて 眠るときまで。

さ、せ、し、す、せ、そ、さそ！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8477z/>

---

ブリリアントグリーン close to kira.

2011年12月26日20時50分発行